［史料］

ドイツ中世商人の日記の邦訳（２）

「ルーカス・レームの日記」（1494－1541年）

山本　健*

Translation of a Medieval German Merchant's Diary (2)

—Tagebuch des LUKAS REM aus den Jahren, 1494–1541—

Takeshi YAMAMOTO

はじめに——史料の性格づけ

本誌第10号（2002年11月）の「ドイツ中世商人の日記の邦訳(1)」の「史料の紹介」の箇所で、私はこの史料そのものについて言及していない、という不手際をおかしていた。そこで本号で、この不備を補うべく、この場を借りて言及しておく。

この「ルーカス・レームの日記（1494–1541年）」は、19世紀中期にアウクスブルク市立図書館の司書であったベネデクト・グライフ（B. Greiff）によって、その手稿が「発見」され、1861年の「シュヴァーベン＝ノイブ

＊やまもと・たけし：敬愛大学国際学部助教授　ドイツ中世史
Associate Professor of German Medieval History, Faculty of International Studies, Keiai University.

ルク歴史協会の年報26号の中に「アウクスブルク市の商業史への寄稿(Ein Beitrag zur Handelsgeschichite der Stadt Augsburg)」との副題をつけて公表された[1]。

(A) 史料について

B・グライフがアウクスブルク市立図書館で見いだした、この日記の原本(Original)は、もともとは、銀行家のフリードリヒ・フォン・ハルダー(Friedrich von Halder)氏の私的文庫(Privatbibliothek)に所蔵されていたものであった。しかし、この貴重な文庫は1846年にアウクスブルク市に寄贈されて、アウクスブルク市立図書館の所蔵本となり、上記のグライフがこの手稿を「発見」し、刊本化して、公表したのである。なお、この手稿は「フォン・ハルダー文庫」と命名され、「Num. 677 in 4°」という整理番号が付けられて、今日に至っている。

ただし、フォン・ハルダー文庫の創設者であるゲオルク・ウォルター・フォン・ハルダー(Georg Walther von Halder)氏が、この原本をどのようにして、また誰から入手したのかは判っていない。しかし、B・グライフは、この日記は、ルーカス・レーム3世の死後も長い間、彼の子孫たちの許に、とくに彼の義理の息子(娘婿)たるハンス・フォン・ハルトリープ(Hans von Hartlieb)が自分の日記を綴る時に、義父のルーカス・レーム3世の日記を手本としていたことなどから、少なくとも、この義理の息子たるハンス・フォン・ハルトリープが死亡する1560年までは、レーム家の許に存在していたものと類推していた[2]。

さて、この原本「*Num. 677 in 4°*」の手稿[3]であるが、この[in 4°]の記号が示す通り、四つ折判の大きさであり、また2枚目の見開き右ページの「この冊子の目次(Register ditz biechlius)」の下に、ラテン語でこの冊子が「56葉から成ることは確定済」(Constat ex folli 56)と記されている。したがって、この冊子は112ページから成る。しかし、112ページのうち、25ページ分が白紙である。また、第1章には+と#が、第2章からは、各一葉の右上端に算用数字(1〜51まで)が記されている。最初の1枚と最後の

2枚には数字は記されていない。

この原本には章立て分類はされておらず、ただ小見出しとページ数とが記載されているだけである。したがって、日記の内容の理解を容易にするために、便宜上、訳者が章立て構成と各節ごとの小見出しをつけた。なお、原本では以下のようになっている。

第1章：＋～＃葉

第2章：　1～17葉

第3章：21～32葉

第4章：33～40葉

第5章：41～44葉

第6章：24～28、30葉

第7章：45～47葉

第8章：48～51葉

第9章：52～53葉（ただし、これは最後の葉であり、この数字は打たれていない）

第10章：18～20葉

この構成から判るように、第6章〔隠居分〕は本来の目次には特記されておらず、第3章の中に混入していた。この隠居分関連の内容を一つの章〔第6章〕にまとめて編纂したのは、B・グライフであった。

(B)「日記」の史料的位置づけと「日記」の主題

この「ルーカス・レームの日記」は、従来、16世紀初期の南ドイツの商業史や、とくに対ポルトガル商業やルーカス・レームが社員として所属していたヴェルザー＝フェーリン商会（Welser-Vöhlin Gesellschaft）の構造の解明のために利用されていた。

また、この「日記」は単に年月の流れに従って要約的に記録しているに過ぎず、確かに、厳密な意味で日記と呼べる代物ではない。マルク・ヘーバーラインはこの「日記」を、その構成と表現の点に注目して、「名誉ある商人が自己認識を表現した自伝的な遺言状である」と解釈している[(4)]。

彼はその事例として、ルーカスが自分に都合が悪い事実を完全黙殺している点を挙げている。すなわち、「彼が1515年（ヴェルザー商会を退職する２年前）に、すでにヘーヒシュテッター家（Höchstetter）と出資（社員）契約を結んでいた」事実（これは、もう２年間、ヴェルザー商会へ社員義務が残っており、それ故に、義務違反行為）は、同「日記」には記載されていない。この事実は、ヘーヒシュテッター家の史料（「1515年のヘーヒシュテッター商会の会社定款」）にルーカス・レームの名前が参加者として記載されていることから明らかである(5)。しかも、ルーカスが係わろうとした、このヘーヒシュテッター商会は、当時、良心のない営業戦略を実施する商会と同義語であり、1529年に不名誉な形で、破産した会社である(6)。彼の人生でのこれらの汚点を消すべく、自分の人生や仕事を「正しい光」に戻すことが彼の急務であったのだろう。そのため、「日記」には、常に無能で、不誠実で、そして不名誉な商人との比較を通して、自分がいかに「有能であり、また救世主」であったかを証明するため、「日記」の随所にそのような事例を多数、散りばめていた(7)。こうして、彼は、自分の有能さを、ヴェルザー商会のその他の社員の不名誉でがさつな行動と対比することで、証明しようとしていた、とM・ヘーバーラインは読み取っていた。したがって、このような論点から、M・ヘーバーラインは、ルーカス・レームの「日記」の主題は、「秩序と名誉」であり、この命題を子孫たちに示すための一種の「遺言状」であったと主張している(8)。

（注）

(1)　Benedikt Greiff: Tagebuch des Lucas Rem aus den Jahren 1494 bis 1541. Ein Beirag zur Handelsgeschichte der Stadt Augsburg. In:26.*Jahresbericht des Historischen Kreisvereins im Regierungsbezirk von Schwaben und Neuburg*. Augsburg 1861, S. 1–110.

(2)　*Ibid*., S.109の原注306を参照。なお、このハンス・フォン・ハルトリープは1519年11月10日に生まれる。彼はもともとは商人にではなく、学者になるように教育を受けていた。たとえば、彼は1533－35年にかけて、イタリアのパドヴァでヴォルフガング・ベリンガー・フォン・ヴィムプェン博士に師事したり、さらには、フランドルのブルッヘでフランス人のカルロ・ゲラルドの指導を受け、1536年にはアントウェルペンへ、またルーヴァンへ移動し、さらに1537－39年まで再度、パドヴァで研鑽に励んでいた。1539年に、彼はルーカス・レームの許を訪れ、そして1540年から９年間、同商会に参加した。そのために、彼はまず、ヨーハン・ノイドルファー（Johann Neudorfer）に師事して簿記を学ぶために、ニュルンベルクに

赴いている。

ルーカス・レームは彼をさしあたり宝石の取り引きに従事させた。彼はその販売のために、フランス王室やイギリス王室を相手にして活躍した。1543年に、彼ははじめてヴェネツィアのドイツ会館の営業を一任された。そして1544年12月16日に、レームの長女マグダレーナと結婚した〔新郎：25歳、新婦：17歳〕。

(3) 原本（オリジナル）は、アウクスブルク国立・市立図書館から、マイクロフィルムの形で入手したもの「*von Halder'sche Bibliothek Num. 677 in 4°*」を利用した。そのため、判読しがたい箇所や色あせていて不鮮明な箇所もあった。

(4) Mark Häberlein, "Die Tag und Nacht auff Fürkauff trachten". Augsburger Großkaufleute des 16. und beginnenden 17. Jahrnunderts in der Beurteilung ihrer Zeitgenossen und Mitbürger. In: Johannes Burkhardt (Hg.) *Augsburger Handelshäuser im Wandel des historischen Urteils*, Berlin 1996, S. 46–68. とくに、S. 49.

(5) Hans Niedermayr, Ein Gesellshaftsvertrage der Höchstetter vom 1515, in : *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben*, Bd. 76, 1982, S. 76–91.

(6) R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, Bd.1, jena 1896, S. 212–218を、また、E. Kern, Studien zur Geschichte des Augsburger Kaufmannshauses der Höchstetter, in: *Archiv für Kulturgeschichte*, Bd. 26, 1935, S. 162–198 を、また、M. Häberlein, *op. cit*., S. 49をも参照のこと。

(7) M. Häberlein, *op. cit*., S. 49–50. ルーカス・レーム＝救世主の根拠としては、たとえば、①1498年（17歳）2月2日: ミラノ支店で帳簿の記載ミスを指摘、②1509年（28歳）10月10日: マデイラ島の代理商の不正経営の摘発、③1511年（30歳）6月22日: フリブール支店で決算書のミスを訂正など。またヴェルザー商会＝悪者の根拠としては、①1509年（28歳）1月23日: 「もはやポルトガルへは派遣しない」という約束に反して、 8月に2度目のポルトガルへの出向を強制、②1517年（36歳）11月17日: 同商会の粉飾決算（全収入を3分の1に圧縮し、負債額を1割減額）で、出資者をだます、など。

(8) M. Häberlein, *op. cit*., S. 50.

〈邦訳〉ルーカス・レームの日記（1494－1541年）

アウクスブルク市の商業史への寄稿（1861年）、B・グライフ編

日記の目次（1～110ページ）

編者の序言 ――― S.Ⅶ～XX

第1章　私の両親の出生と結婚式そして〔それ以外の〕若干の情報

〔ルーカス・レーム3世の家系図の紹介〕 ――― 1～4ページ

〈以上、第10号（2002年11月）掲載〉

第2章　私の誕生、人生そして頻繁な長期にわたる旅行（商旅）

――― 5～29ページ

第1節　ルーカス・レームの誕生と子供時代: 1481－1494年

第２節　ルーカスの青春期（商業見習いの時代）: 1494－1499年
第３節　ヴェルザー商会の社員時代: 1499－1517年
（A）リヨン支店時期――1499－1503年
（B）ポルトガル滞在期間――1503－1508年
（C）再契約後の煩多な１年間――1509年
〈以上、本号〉
〈以下、次号掲載予定、章タイトルは暫定訳〉
第３章　私の主な財産と収益そして商会の決算 ――― 30～42ページ
第４章　私の婚約、結婚、私が妻に与えた結納品 ――― 43～51
第５章　私の結婚引き出物 ――― 52～55
第６章　私の隠居分（相続・取得した動産を含む） ――― 56～63
第７章　私の私生児の誕生と彼らの性格 ――― 64～65
第８章　私の嫡出子の誕生 ――― 66～70
第９章　私の商会の雇用人 ――― 71～72
第10章　私の納税 ――― 73～76
注記 ――― 77～110

（注記）①訳文の〔　〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、（　）内は原語である。
②各章内の小見出し（節）も、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。
③（注）は重要な内容のもののみを原注から選び、通し番号を付けた。また、原注にはないが、必要と思われる関連文献も（注）に記載した。

第２章　私の誕生、人生そして頻繁な長期にわたる旅行（商旅）

イエス・キリスト　聖母マリア

［S.5］

第１節　ルーカス・レームの誕生と子供時代（1481～1494年）

◆1481年

1481年12月14日（金曜日）真夜中の12時に、私ことルーカス・レーム〔3世〕が誕生した。すなわち、全能なる神は、聖母マリアと全ての天界の塵を介して、私に素晴らしい生命を授けた。――もちろん、私の寿

命（死去）を前もってお定めになっていた〔ことは言うまでもない〕。

◆1492年〔11歳〕

1492年の棕櫚の日曜日（Palmtag）〔4月4日〕に、私は初めて聖なる秘蹟（Sacrament）を受けた。

◆1493〜94年〔12〜13歳〕

その1年後〔1493年〕に、私の父は私を〔ウルム（Ulm）の北東、約15kmに位置する〕ライプハイム（Leipheim）近くの主任司祭（Pfarrer）に預けた。〔そのため〕私は12歳から13歳までの2年間を、このライプハイムと〔その近在の〕リートハイム（Rietheim）〔ライプハイムから北西、約2kmに位置〕で過ごした。——それ以前では、たとえば1488年〔7歳〕の時にウルムで数ヵ月過ごしたくらいの記憶しか、私にはなかった。

第2節　ルーカスの青春期（商業見習いの時代）（1494〜1499年）

◆1494年〔13歳〕

1494年10月6日、私はアウクスブルクを立って、10月15日にヴェネツィア（Venedig:Venezia）に到着した[1]。〔この旅で〕私を運んでくれたのは、郵便配達業者（Postbote）ハンス・プフィスター（Hans Pfister）[2] であった。ヴェネツィアには〔ヴェルザー商会の支店が2店舗あり[3]、それらは〕ハンス・シュテーベハーバー（Hans Stebehaber）とハンス・ラウギンガー（Hans Lauginger）に任されていた。彼らは私をジェロウム・デラナーヴ（Jerome Delanave）の家に預けた〔下宿させた〕。

◆1495〜96年〔14〜15歳〕

しかし、その彼も翌〔1495〕年の8月に死去した。私はこの〔死亡した〕彼の寡婦の許に1495年の10月1日〜2日まで留まっていたが、〔その後は〕さしあたり〔イタリア語を学ぶために〕[4]、私はグイード・ダンジェロ（Guido D'Angelo）の家に移り、翌〔1496〕年の復活祭（4月11日前後）まで彼の家に下宿した。その後、私は〔アウクスブルク生まれの〕[5] 運送業者（Trager）ウルリヒ・エーインガー（Ulrich Ehinger）の許を訪ね、そこで5ヵ月半にわたって算術（算盤：Rechnen）を学んだ。そ

の後、私は簿記（Buchhaltung）を学ぶために〔簿記〕学校に３ヵ月間通った。そして私は会計簿（Schuldbuch）と仕訳帳（Jornal）を作れるようになった[6]。この〔1496〕年、私の父親の病がますます嵩じ、やがて〔父親は1496年８月３日に死亡した〕[7]。父親の死は〔成人の年齢に達していなかった〕私を大いに落胆させた。〔他方〕兄のアンドリウスや従兄弟のクリストフ・ヴェルザー（Cristoph Welser: 1480－1536年）[8] そして義兄のロウカス・エカイン（Laucas Echain）などは、もはや親を必要としない〔成人の年齢に達していたので、私ほどには落胆していなかった〕。父の死をめぐって、私は伯父のアントーン・ヴェルザー（Anton Welser: 1451－1518年）[9] やその他の人たちに書簡を送って、〔塞ぎ込んでいる〕私を〔気分転換のために、今いるヴェネツィアから〕別な所に移してもらえるよう依頼した。

◆1498年〔17歳〕

この件は〔次の様に〕解決された。すなわち、1498年の四旬節（復活祭前40日間の斎戒期）の第４日目（土曜日）に、私は馬で、しかも４日間をかけて、〔北イタリアの〕ミラノ（Mayland: Milano）に向けて出発した。すなわち、私はパドヴァ（Padua: Padova）、ビチェンツァ（Vyzentz: Vicenza）そしてヴェローナ（Bern: Verona）を経由して、２月２日に私はミラノで〔アウクスブルク出身者で、ヴェルザー商会のミラノ支店長たる〕[10] アントーン・ラウギンガー（Anton Lauginger）に会うべく、ヴェルザー商会ミラノ支店を訪問した。〔ところが〕この支店では、アントーンが帳簿

［S.6］

の記載ミスを犯していた。〔その誤記に気づいた〕私は彼に〔そのミスを指摘し〕その訂正の手助けを買ってでた。このため、私は〔その後の〕多くの幸運と後ろ楯を、さらには〔就職への〕推薦を手にすることができた。結局、私は４月24日まで〔の約３ヵ月間〕このミラノ支店に留まった。

４月24日に、私は馬で、〔ヴェルザー商会の〕良き仲間（社員）たちと

一緒に〔ミラノを立って〕ヴェルチェルリ（Verzel: Vercelli）、トリノ（Turin: Torino）そしてモンスニ峠（Monsines: Monte Cenis）などを経由して、リヨン（Lion）に向かった。

5月3日に、私は〔アウクスブルク出身で、ヴェルザー商会のリヨン支店長たる〕ナルシス・ラウギンガー（Narzis Lauginger）のいるリヨンに到着した[11]。〔ミラノ支店での私の仕事ぶりを耳にしていた〕彼は私を必要としていたらしく、6月27日までの〔約2ヵ月間〕、私を〔臨時〕社員として雇用し、リヨンに引き留めた。〔リヨン滞在中〕私はカプス（Cappus）〔帳簿〕[12]に記録したり、同支店の勘定書を作成したりした。それ以外の仕事でも、彼は私を重宝して使用していた。

◆1498〜99年〔17〜18歳〕

6月27日に、私はピエール・ドイブール（Piero Deuburg）宅を訪れた。そして彼の許で1499年の7月19日まで〔の13ヵ月間〕、現地の言葉〔フランス語〕を習う。——上記のピエール・ドイブール宅には、私の他に、〔すでに私より先に住み込み、フランス語を学んでいる〕先輩格にあたる3人の成人した学生（3 brieder gewachsender, die al mein heren wasen）がいた。〔彼らと〕私は、上記の13ヵ月間、〔人間としての〕節度を著しく逸脱した〔困窮〕生活を——特に貧弱な食事を——強いられた。それは、彼の妻の吝嗇ぶり（Karkeyt）[13]が著しく度を超していたからである。もし私が〔この件について〕すべてを語ろうとするならば、1リース（Ries papier）〔大判紙100枚〕という大量の紙があっても足りないくらいである。私たちすべての住み込み学生（al eehalten）は、食事と白ワインにありつくために、何らかの計略や騙しの術策を駆使しなければならなかった。そうでもしなければ、私たち学生は〔あの〕ケチな妻の許で住み込み生活などできなかったことであろう[14]。——そして私は1499年7月19日に彼の許を辞した。

◆1499年〔18歳〕

7月19日から29日にかけて、〔現地のフランス語を習得した〕私は〔再度、臨時社員として〕ヴェルザー商会・リヨン支店に雇用された。

7月29日に、私は、すでに獲得していた商人としての知識をさらに増やそうと思い立ち[15]、リヨンのジャン・リーシェル（Jan Rischer）宅を訪れた。それは、彼がリヨン市の造幣局長（Mintzmeister）の要職に就いていたからであった。しかし、彼はリヨン市の出納係（tresorier）としてミラノへ出向いていて〔留守であった〕。〔しかし、ありがたいことに〕彼の妻は私に大量のリヨン貨幣（die lione Müntz）[16] を見せてくれた。その数量たるや、数えきれないくらい膨大であった。

第3節　ヴェルザー商会の社員時代（1499〜1517年）

（A）　リヨン支店時期（1499〜1503年）

◆1499年〔18歳〕

11月13日に、ヴェルザー商会のリヨン支店の〔支店長たる〕ナルシス・ラウギンガーが私に、アウクスブルクにあるアントーン・ヴェルザー＝コンラート・フェーリン商会（die Gesellschaft Anton（I）Welser＝Konrad Vöhlin）[17] いわゆるヴェルザー商会本店の会計係の部署（General-rechung）[18] に参加させるというチャンスを与えてくれた。聖なる三位一体の御名において、またその聖母マリア、そしてあらゆる聖なる神々の御名において、私はアントーン・ヴェルザーの許に、すなわちヴェルザー商会に〔本採用されて〕出社した。食事と衣服〔の支給〕はあったが、給料は3年間支給されなかった（3 Jahr on Belonong）。

◆1500年〔19歳〕

3月1日から14日にかけて、私は若干の金銭的要件のために、アヴィニョン（Avingnon: Avignon）に馬で向かった。

5月10日から7月21日にかけて、私はパリ（Paris）、ルーアン（Ruan: Rouen）そして〔今日のベルギー・フランス両国を流れる〕スヘルデ（シェルト）（Schelden: Schelde）河〔沿いの諸都市〕を、またムーラン（Mulins: Moulins）、ブールジュ（Bruges: Bourges）、トゥール（Tors: Tours）、ブロワ（Blos: Blois）そしてその他のフランスの美しい諸都市（Stett）をも馬で訪ねた。私にとって、この73日間に及ぶ、また良き仲間（社員）

と一緒の商旅は、素晴らしくかつ楽しい、そして気晴らしになる旅であった。しかし、この旅〔の真の目的〕はヴェルザー商会の貸付金の取り立て業務であった。7月21日に、私はリヨンに戻った。

その後、私には〔リヨン支店で、同支店の統括下にある個々の支店の〕決算書を作成し[19]、それを〔アウクスブルク本店に〕引き渡すという〔仕事が〕待っていた。そしてこの年〔1500年〕に私が行った仕事が――〔すなわち、各支店からの〕帳簿や勘定書（Bücher u. Rechnung）を受け取ることが――〔リヨン支店での〕私の業務になった。

10月8日に、私は良き仲間（社員）と一緒に、モロッコ産のサフラン（marokanisch Safran）を買い付けるべく、リヨンからアルビジョワ（Alvages: Albigeois）〔南フランスの高地ラングドック〕地方に馬で向かった[20]。私は粗悪なサフランには金を投資しなかった。私がリヨンに戻ったのは11月15日であった。

［S.7］

12月15日に、私は〔リヨン支店の統括下にある〕ジュネーブ（Genff: Geneve）、ベルン（Bern）、フリブール（Freiburg im Uechtland: Fribourg）の各支店を順々に馬で回り、それぞれの支店から勘定書を受け取ったり[21]、その他の仕事をこなした。翌〔1501〕年の1月13日に、私はリヨンに戻った。

◆1501年〔20歳〕

2月17日に、私はリヨンから〔本店のある〕アウクスブルクへ馬で向かった。これは〔私が正社員になってから〕初めてのアウクスブルク〔本店〕への旅であった。私はこの旅の途中、多くの支店で〔仕事を〕片づけねばならなかったので、〔多くの時間が費やされ、そのためアウクスブルクの〕実家に24日以上、滞在できなかった。私は4月27日に再びリヨンに戻った。

7月24日に、私は馬でリヨンを立ち、ジュネーブ、ベルン、フリブール〔の各支店〕を回って、それぞれの勘定書を受け取った。8月10日にリヨンに戻ったが、体調を崩した。そして、12日間が経過した後、私は

急に重体に陥り、そして〔2ヵ月強という〕長期にわたり病を煩った。〔その間〕死霊が私の生命を奪うのではないかと思うこともあった。また〔その症状は〕激しい疫病による〔と思われる〕発熱（pestelenzials fieber）を伴い、真っ直ぐに歩けなかった程であった。そのため、私は転地療養（den Luft zu verkeren）を勧められた。

10月25日に、私は〔転地療養のために〕馬で〔南仏のアヴィニョンの南東、40kmに位置する〕ボニュー（Bendox: Bonnieux）やジュネーブなどにも行ったが、依然として病気がちであった。11月15日にリヨンに戻った。

12月19日に、私は〔再度、転地療養のため〕ヴィエンヌ近くのサン・アントーニオ（Sct. Antonio de Vienes）に馬で行ったが、12月23日にリヨンに戻る。病は私の足に生じた麦角中毒症（Antoniusfeuer/Antonsfeur）が原因であった[22]。

◆1502年〔21歳〕

3月31日に、〔ようやく病から癒えた〕私は馬でリヨンを立って、ジュネーブ、ベルン、フリブール〔の各支店〕を回った。〔ジュネーブで〕大量の銀貨を船に積み込み、〔ローヌ（Rotten: Rhone）河を利用して〕リヨンに運ぼうとした。その途中、〔船がジュネーブから南西に約35kmに位置するセイセール（Sissel: Seyssel）で難破したため〕約600マルク（Mark）の銀貨をローヌ河で失う。これは大きな災いであり、私にとっては多額の損失であった。

4月17日にリヨンに戻るも、〔船の遭難情報を聞きつけた〕私は、翌18日の早朝に、馬で船が難破したセイセールへと向かった。しかも、出来る限り多くの馬方を引き連れて。そして、沈んだ荷物を引き上げるという大仕事に加わり、〔引き上げた荷物の搬送のために〕昼夜を問わずサヴォワ（Savoya: Savoie）地域を往復するなど尽力した。

5月19日に私は馬でアウクスブルクへ向かった。しかし、私はドイツへ帰国する時も、またリヨン〔すなわち、フランス〕へ戻る場合も（am hinaus und gen Lion reiten）、〔1499年のバーゼルの和約でスイス10邦が神

聖ローマ帝国から離脱し、事実上の政治的独立を勝ち取ったために[23]、スイスを通行する場合、これまでになかった〕通行税（Zollen）をすべて支払わなければならなくなった。〔また〕私はチューリッヒ（Zirch: Zürich)、ベルン、フリブール、ジュネーブなどで多くの仕事をやり遂げたので、それぞれの都市に〔思っていたよりも〕長く滞在するはめになった。そのため、リヨンに戻ったのは８月23日であった。

10月７日に、私は馬でアルヴィジョワ地方へ向かった。その途中、三日熱の症状（Fieber terzana: dreitägiges fieber）がでたが、その病を押して、私はアルヴィジョワ地方に乗り込んだ。そして、私はモロッコ産のサフラン（Saffran）に、有益で、確実な投資を行った。〔初めは、損失が出るのではと〕ハラハラしたが、〔最終的には〕利益を手にした。私はその症状〔が癒えない〕まま、11月15日にリヨンへ戻った。不思議なことに、〔神の〕善良なる御心によって、症状が回復した[24]。

12月12日に、私は、神の御名において、シモン・ザイツ(Simon Seitz)[25]そしてスキピオ・レーヴェンシュタイン（Scipio Lewenstein）と共に馬で〔スペインの〕サラゴサ（Saragossa: Zaragoza）に向かった。私たちは〔その途中、現在のスペイン領バスク地方の〕トローサ（Tolosa）に９日間の滞在を余儀なくされた。そして私たちは、フランス王国とスペイン王国との戦争[26]の煽りを受けて、ロンセヴァール山脈（die Gebirg Roceval)、すなわちロンセスヴァーリエス峠（Pass de Roncevalles）〔現在のイバニュタ峠〕などを越えてナバーラ（Navarra）地方へ、そして〔その中心都市〕パンプローナ（Pampalona: Pamplona）を通過して〔1503年の〕１月７日にようやくサラゴサに到着した。私たちは、〔サラゴサに〕馬で来ていた大公フィリップ１世（King Philips）〔美男王〕[27]への謁見を許された。〔上記の〕シモンとスキピオは〔トレドにある〕スペイン国王の宮殿（Spagna king hoff）に参内した後、馬でリスボンへ向かった。

[S.8]

私はサラゴサに留まり、地元産[28]のサフランを数ザウム[29]購入したり、多額〔の金銭〕を羊毛取引に投資した。ベルナルト・サルメス（Bernaart Salmes）宅では、過分にして、十二分なる歓待を受けた。

◆1503年〔22歳〕

1月13日に、私は馬でヴァレンシア（Valentz: Valencia）に向かった。私はここで立派な聖セバスティアン祭（St. Sebastian）〔祝祭日は1月20日〕の行列と巡礼を、さらにこの上なく美しく、見事な聖ヴィンチェント祭（St. Vizenz: Vincent）〔祝祭日は1月22日〕の行列などをも見物した。私は〔手持ちの〕通貨を両替し、そしてその差額（Wechsel Geld）を受け取ることができた。私は、修道士ジャン・ブクリー・ド・メテラン（Jan Bucly de Metelin）宅を〔宿泊場所と定めて〕馬で訪れたが、しかし〔そこに居合わせた〕ケサロ・ベルチ（Cesaro Berzi）が私を強引に彼の自宅に連れていった。私が再びサラゴサに戻ったのは、1月27日であった。

(B)　ポルトガル（リスボン）滞在期間（1503〜1508年）

4月21日に、私は〔ポルトガルのリスボンをめざすべく〕新参の使用人（Trabantten）1人だけを連れて〔アラゴン王国の〕サラゴサを馬で出立し、カスティーリャ王国のソリア（Siria: Soria）方面へ向かった。そして私はさらに〔西方の〕メディナ・デル・カンポ（Medina del Campo）、サラマンカ（Salamancha: Salamanca）を、そしてポルトガル王国のモンフォルテ（Monfaldo: Monforte）を経由して、〔ようやく、目的地の〕リスボンに到着したのは5月8日であった。このリスボンで、私は〔さしあたり〕ジュリアン・ジョコンダ（Julian Jocunda）宅に9月まで逗留したが、〔その後に〕素晴らしい自宅を購入した。

8月1日に、〔すでにリスボンに到着していたシモン・ザイツを含めた〕私たちはポルトガル国王〔マヌエル1世〕との間で、インド向けに装備を整えた3隻の船舶借り受け契約（Vertrag mit Portugal king der armazion 3 shiff, per Indiam）を結んだ[30]。〔その後〕私は10月、11月そし

て12月〔の３ヵ月間〕発熱を伴う重い病にかかった。私は〔赴任先のリスボンに来てまだ日が浅く、この当時〕まだ気心の知れた知り合いがいなかったので、――もちろん、〔ここリスボンから〕百マイル以上離れている故郷には多くの仲間はいたのだが――見も知らぬ他人からの手助けや助言を〔素直に〕受けいれた[31]。

◆1504年〔23歳〕――〈1505年の誤記[32]〉――

３月25日に、〔ポルトガル国王マヌエル１世から借り受けた〕３隻の船が出航した[33]。

〔これら３隻の船を出航させるまでの〕途方もない苦労、おびただしい労力、そして様々な厄介事が〔すべて〕、私に伸し掛かっていた。それは筆舌に尽くしがたいものであった。

この〔当座的〕会社に対する出資金（Suma for die Campanie）として、私はクルキアティ貨（Cruciati）でM/21（＝2万1,000）強[34]を拠出した。

◆1505年〔24歳〕――〈1506年の誤記[35]〉――

５月22日に、〔上記の３隻のうちの〕２隻の船、セント・ジェロニモ（Sct. Jeronimo）号とセント・ラファエル（Sct. Raffael）号が、さらに〔それから６ヵ月遅れの〕11月24日に、残りの１隻、リオナルダ（die Lionarda）号がそれぞれ〔インドから、無事、リスボンへ〕帰港した。〔これにより〕これまでの途方もない苦労や不安は解消し、私は〔かれこれ〕３年以上も前から期待していた、非常に多方面にわたる大きな権益[36]を手にすることができた。〔ただし〕装備を整えたポルトガル国籍の船舶使用料は〔船舶保険や航路通行料金などを含むため、一般的な船舶使用料金の〕1.5倍（bei 150 pro Cento）と定められていた[37]。

７月に、私は〔ポルトガル国王マヌエル１世とではなく〕ルイ・メンデス（Rui Mendes）[38] たちと〔自前で艤装することを条件に〕３隻の船舶契約を取り交わすことを余儀なくされた。そのため、〔３隻のうちの〕セント・ヴィチェント（St. Vizent）号には1,800クルキアティ貨を、セント・マリア・デルース（St. Maria Deluz）号には1,320クルキアティ貨を、そしてセント・アントーニオ（St. Antonio）号には310クルキアティ貨を

〔出港のための装備支度金として〕投資し、トリスタン・デクンハ（Tristan Decunha）[39] と共に出航した。彼は〔航海の途中〕私たちに度々、理不尽な行為（Gewalt）を行った。〔その極めつけは、これまで十分には知られていない〕第三の陸地（al drei land）〔マダガスカル島〕を探検すべく〔同島への〕寄港を強制したことであった。しかし、そのためにセント・ヴィチェント号とセント・マリア・デルース号の２隻が沈没し、乗組員（水夫）や貨幣〔原資〕そして積み荷を失う羽目になった。セント・アントーニオ号ただ１隻だけがインドに到着し、その後リスボンに〔無事〕帰港した。〔同船に積載していった〕貨幣と積み荷〔の売却で得た資金〕はインドで香辛料（Specerey）に投資され、〔購入した香辛料は、安全輸送のため〕ポルトガル国王の軍船（Portugal kings Schiff）に積み込まれた。その輸送条件は、「フレッテ・エト・ディエット（Frette et dietto）〔船舶利用料と乗組員の人件費の60％を支払うという条件〕」[40] であった。つまり、当時（dz = derzeit）〔海難などによる船舶〕損害は少なかったが、しかしながら、ポルトガル国王マヌエル１世は〔商品の安全輸送という名目で、ポルトガルと輸送〕契約を取り交わすように強要していた。

ほぼ同じ〔7月という〕時期に、伝染病（Sterbent）がリスボンで発生し始めた。私は〔テージョ河をはさんでリスボンの対岸に位置する〕カシリャス（Kazilios: Cacilhas）やアルマーダ（Almada）の村々に、また〔リスボン側の〕ルミアール（Lumiar）、サンタ・マリア・デルース（Sta. Maria Deluz）、カルヴァラーダ（Calvalada）そしてその他の多くの村々へ逃げ込み、その何軒かの家の中で夜を過ごした。しかし、昼間は短時間だが〔仕事のために、リスボン〕市内に入ることもあった。

［S.9］

私たちは〔ありがたいことに〕神のご加護により死なずに済んだ（Gott behiet uns!）。ペスト（Pestilenz）が11回にもわたり〔私の〕家（＝支店）を襲った[41]。そのため、多くの仕入れ係（einkaufer）や下女（megdt）たちが死亡していた。〔この時も〕私は、神、聖母マリア、聖セバスティ

アン（St. Sebastian）や〔肉体的病気の治癒者として敬われている〕聖ロック（St. Rochus）そしてすべての聖なる神々のご加護により、不思議と死なずに済んだ。その後、私は多くの人びとと共に、いわゆる装備を整えたポルトガル国籍の船舶借り入れ契約を取り交わして〔利益をインド交易に求めざるを得ない状況に〕追い込まれた。もし、そうしなかったならば、私は〔他の〕商人たちと同様に、財産（hab）を失っていたにちがいない。〔なぜなら、その後〕4年以上にわたり、容赦なく（on mas）、しかもほとんど絶え間なく、人びとは〔ペストにより〕病死していったからである。

私がポルトガルに滞在していた時期は、1503年5月8日（22歳）から1508年9月27日（27歳）までである。この期間に、私は銅（Kupfer）、鉛（Pley:Blei）、辰砂（Zinober: Zinnober）、精錬銀（Kecksilber: Frishsilber）をはじめとして、あらゆる種類の商品の取り引きを、特にフランドル産の毛織物（Flemisch gewandt: flemische Tücher）に関する、非常に大規模な取り引きを企画した。そして3年間にわたって、低地地方〔今日のオランダ・ベルギー〕、イングランド（Engalander）、ブルターニュ（Brettania: Bretagne）そして東方諸国（Ostland）から穀物を積んだ多数の船舶が商品買い付けのために私の支店にやって来た。

〔他方〕私は船でマデイラ諸島（Madera: Madeira）〔1419年に発見〕、アソレース諸島（Ilhas Dazors: Azorische Inseln）〔1431年に発見〕、ベルデ岬諸島（Capverde）〔1445年に発見〕そしてマグレブ地方〔モロッコからトリポリまでの北アフリカ沿岸地方（Barbarien: Berberey）〕に出向いた。〔その目的は、ヴェルザー家のために、たとえば、モロッコでサフランを購入したり、またマデイラ諸島やラ・パルマ島では船舶を借り受けたり、さらには代理店（Faktoreien）を設定することであった〕[42]。

ポルトガルで、私はかなり大量の香辛料を購入し、またポルトガル国王〔マヌエル1世〕と大規模な取り引きを行った[43]。また私は常時、オリーブ油（Oel）、ワイン、象牙（Helfentzän: Elfentzähn）、綿花などを購

入した。またアルガーニャ／アルジェ（Argarnie: Alger）には数回派遣されて無花果の実（Feigen）などを購入したり、さらにアンダルシア（Andalusia）地方〔スペイン南部〕ではそれ以外の果実を購入した。私の所に持ち込まれた商品はすべて、私が検査した。〔私の所では〕大規模な取り引きが行われていたので、多くの者を雇っていた。つねに3人、4人、否、6人もの使用人（gehilfen）があちらこちら〔の部署〕で働いていた。

◆1508年〔27歳〕

9月27日（水曜日）に、私はリスボンからラステル（Rastel）〔不明〕へ向け出立した。同日、私たちは〔船で〕アイム・プレトン（aim preton）〔不明〕、カバルガ（Cabarga）〔不明〕、パトローノ（Patrono）〔不明〕、イーヴァン・フォン・ドゥーロン（Yvan von Duron）〔不明〕に向かうべく、〔リスボンの西、30kmに位置する〕カスカイス（Casgalis: Cascais）に行く。私たちは2回ほど外海（mer: Meer）に乗り出したが、向かい風のために押し戻された。

10月1日の正午に、私たちは〔改めて〕20隻以上からなる船団を組んで〔カスカイス港を〕出港した。〔しかし〕出港後すぐに向かい風が吹き始めた。そのため、私たち以外の船はすべて〔カスカイス港へ〕引き返した。しかし、私たちはその逆風の中を突き進んだ（fuorn in Voltas）[44]。〔その結果〕10月8日には、私たち〔の船〕はモンディーゴ岬（Cabo Mondego）とポルト（Porto）間の海原を漂う羽目になった。同日、海賊船（Bisgayer）が私たちの船を襲撃してきたが、私たちは真夜中〔の暗闇に紛れて〕その海賊船を振り切り、逃げおおせた。10月12日に、私たち〔の船〕は飲料水不足に陥り、また10月17日まで逆風の中を突き進んだが、〔逆に〕8マイル戻る結果となってしまった。〔しかし、ありがたいことに〕同17日になって、願っていた南西の追い風が吹き始めた。そして、翌18日の夜にはラバハス（la Bayas）地方に到着した。〔そして、さらに〕私たちの船は一昼夜走り続け、ラ・コルーニャ（la Coromha: La Coruna）の港に到着したのは、10月19日の夜であった。

10月20日に、私は、船主（Schifherr）、上級水夫〔航海士（Hochpotzman）〕そして船長（Stiurman）と共に、馬でラ・コルーニャから聖人ヤコブが埋葬されている〔サンティアゴ・デ・〕コンポステラ（Compostela）に向かった。同地には夕方に到着し、22日まで滞在した。〔翌23日の〕早朝に、私は馬でラ・コルーニャに向けて出立し、同夕方に到着した。しかし、向かい風が吹いていた。〔そのため〕海賊モンドラゴン（Seeraber Mondragen）[45] を捜し出し、彼を捕まえるべく〔同地に集結した〕フランス国籍の４隻の〔軍〕船（4 franzosen schif）と私たち〔の船〕は、港での待機〔を余儀なくされ〕た。

［S.10］

10月23日の夕方遅く、追い風〔が吹き出し、その風〕に乗って、私たちはラ・コルーニャから出航した。〔しかし〕真夜中過ぎに暴風雨に遭遇し、さらに非常に暗かったこともあって、私たち〔の船隊〕はちりぢりになり、同僚船を見失ってしまった。私たちの船は29日まで〔自力〕航行し、ブルターニュ地方に近づき、〔そして〕バツ島（Ilha de Bas: Batz）とタラスコン（Tarascon）の間〔の海岸〕に〔私たちの船〕セント・ポール号は漂着した。そこで、10月29日から31日までの３日間、当地のウィルヘルム・マルチン（Wilhelm Martin）宅[46] に投宿した。

11月１日に、私たちはロスコフ（Raschon: Roscoff）に出かけた。〔ここには〕素晴らしい修道院がある。〔この修道院では〕聖ヨハネの御指であると言い伝えられている指を見ることができるのである。私たちは〔ロスコフからの〕帰路、非常に強い追い風に乗って戻った。ただし〔その途中〕岩礁が多かった。――私たちは小型船（Barel: Barinel）[47] に乗っていたので、大いに不安を覚えた。――

11月２日に、私たちは、他の２隻の船と共に、ブルターニュ地方を出航し、11月５日遅くにイングランドのダンジネス（Tunes: Dungeness）[48] 岬の手前に到着し、そこに錨を降ろした。〔外は〕真っ暗で、しかも強風が吹いていた。しかし私は陸地を〔しっかりと〕目でとらえていた。真夜中を過ぎた頃から風が激しく吹き始めたので、〔船の〕錨は持ちこ

たえきれず、そのため、私たちはやむなく追い風の吹く方向に船を走らせざるを得なかった[49]。本当に暗かったので、私たちは砂州〔浅瀬〕に立ててある航路標識（Marke der Band）さえも見えない程であった[50]。〔その後〕ようやく、水先案内人（pilott）が私たちの許に来た。

11月6日朝8時頃に、私たちは砂州に降り立ち、そして全員が生きているという実感を味わった。神と聖レオナルド（Sct. Leonhart）によって――しかも、今日6日は聖レオナルドの日でもあった[51]――私たちの命は救われたのであった。私たちは同日の夕方、非常に強い大風〔追い風〕が吹いたので、〔オランダ南西部の〕ゼーランド地方のアルネムイデン（Armua in Seeland: Arnemuiden）〔ミッデルブルクの東、約54kmに位置〕[52] に到着した。

11月7日に、私は〔馬車で〕ミッデルブルク（Middelburg）を[53]、そして翌8日には〔その北、約5kmに位置する〕フェーレ(Fer: Veere)[54]を訪ね、そして再びミッデルブルクへ戻った。9日には、私は〔馬車で、ミッデルブルクから東、約48kmに位置する〕ベルヘン・オプ・ゾーム(Bergen: Bergen op zoom)[55] を訪れた。

11月10日遅くに、私はアントウェルペン（Antorf: Antwerpen)[56] に向かった。アントウェルペンとベルヘン・オプ・ゾームの街では、寒い中、私は商品（sechen: Sachen）の調査のために、市場をあちこちと〔歩き回りながら〕、12月26日まで〔の約1ヵ月半、これらの街に〕滞在した。

12月26日に、私は4人の優秀な社員（Gesellen）を伴って〔ヴェルザー商会との雇用契約の更新のため〕馬で、アントウェルペンからケルン(Cöln: Köln)、メス(Mentz: Metz)〔この当時は神聖ローマ帝国領〕、シュパイヤー（Speir: Speyer)、ウルム〔を経由するルートで〕アウクスブルクへ向かった。1509年1月12日の午後3時から4時の間に無事、アウクスブルクへ到着した。

(C)　再契約後の煩多な1年間―多地域への商旅―（1509年）

◆1509年〔28歳〕

1月17日に、私は〔雇用契約更新までの自由な時間を利用して〕徒歩で〔アウクスブルクの北東、約6.5kmに位置するアイヒアハ（Aichach）の〕聖レオナルド礼拝堂[57]を訪ねた。そして19日にアウクスブルク市内に戻った。

1月23日には〔同様に〕、私は馬で〔アウクスブルクの北西、約24kmに位置する〕ディリンゲン（Dillingen a.d. Donau）を訪ね、翌24日にアウクスブルクに戻った。ここアウクスブルクで、私は、私の主人〔ヴェルザー商会の当主アントーン（1世）・ヴェルザー：日記執筆者たるルーカスの伯父に当たる人物〕と〔会食などに招かれるなど〕楽しく、そして満足のゆく生活を共にした。そして3月19日に、〔私の主人から〕二度と私をポルトガルに派遣しない、という優遇措置（Verwenen:Bevorzugt）ないしはその保証（Vertresten: Bürgschaft）〔確約〕を取り付けて、私は〔雇用契約の更新に関する〕初めての宣誓を行った。

3月24日（水曜日）に、私は馬でアウクスブルクから〔北イタリアの〕ボルツァーノ（Botzen: Bolzano）へ向かった。そして同地には1日だけ滞在した。

4月2日に、私はヴェネツィアに到着した。〔さらに〕4日にパドヴァ（Padova）に移動した。同地では、4月11日まで、私の弟たるギルク（Gilg: 1484〜1535年）[58]の許に逗留した。そして〔その後〕馬車でヴェネツィアに戻った。

4月13日早朝、私はヴェネツィアから〔その北に位置する〕メストレ（Maisters: Mestre）に向かった。同地には私の馬が用意されていた。ヴェネツィア、パドヴァ、トレヴィーゾ（Terfis: Treviso）で、〔そして〕その途中のトレント（Trient: Trento）でも、私は教会を訪問する際、前もってすばらしい手土産（Gebey: Gabe）を持参するのを忘れることはなかった。私は〔上記の〕各都市の周辺部〔の村々〕にも――たとえば、モン［S.11］
テルダーン（Monterdon）などの村々にも――足を延ばした。〔この旅は、この様に、各都市やその教会などを〕訪問ないし見学するのに打ってつ

けの〔春の〕のどかな日々に行われた。

4月18日に、私は〔中部イタリア・マルケ地方の〕ロレト(Loretto: Loreto)を訪ねた。同地は、聖母マリアが慈悲深くも数多くの奇蹟を示した所である。〔それは〕すばらしい恩寵(Gebey: Gabe)である。私は同地に2日間、滞在した。

4月24日に、私は弟のジョルク〔博士〕(Doctor Jilg)と一緒に、ローマ(Rom: Roma)を訪問した。〔その際〕私たちは大変な苦労を背負いこみ、また大きな不安を、かつ厄介な問題を抱え込んでしまった。というのは、教皇領がヴェネツィア軍の攻撃を受け、甚大なる被害を被ったため、私たちは教皇領の通過を断念しなければならなかったからである。ローマには10日間滞在した。〔その際〕私は主人筋に当たるクリストフ・ヴェルザー[59]——彼は私と仕事の上で、かなり良好な関係にあった——の許で、〔ただし、自分の食い扶持は〕自分で負担して(das mein Geld)[60]、生活した。また私は教皇の白亜の〔バチカン〕宮殿(des Papst weissen palast)を訪問し、とくに、教会のすべての聖遺物(al kirchen haltong: Heiltümer)[61]や新・旧の宝物(Gebey: Gabe)を見学した。その他には何らの仕事もせず、ただのんびりと時間を過ごすだけであった。

5月8日に、私は馬で〔ローマの北、60kmに位置する〕チビタベッキア(Civitavecchia)を訪ねた。同地で、私はフランス国籍のガレオン船(franzosische Galeone)〔3層甲板の大型帆船〕セント・ボナヴェントゥーラ(St. Bonaventura)号〔船主(Patron)はジャン・カテラン(Jan Catelan)〕に乗船した。

5月11日に、〔その船で〕私たちはジェノア(Genoa)市の手前に到着し、そして私は同市が武装している様子をうかがっていた。〔すると〕一隻のカラヴェル船(Caravel: Karavelle)が、私たちのジェノア向け商取り引きを力ずくで阻止しようとした[62]。潮流の勢いが良く、同船は私たちの取り引きを阻止することに成功した。そこで、私たちは翌12日に隣のサボーナ(Savona)に船を回航することを余儀なくされた。そして追い風が吹きだした5月15日まで、同地に留まっていた。

5月17日に、私たちはヴィラ・フランカ（Vila farancha）港に入港し、ニース（Niza: Nice）を訪れた。〔ただし〕絶えず向かい風が吹き荒れていたので、出航を中止した。

5月19日早朝に、私は小型船（Barel）[63] でカンヌ（Canas: Cannes）に行き、そこで1頭の馬（Ros）を購入した。そして、私はこの馬に乗って〔カンヌの西北、約10㎞に位置する〕グラース（Grassa: Grasse）を訪ねた。

5月21日に、私は〔カンヌから南西、約50kmに位置する〕サント・マキシム（Ste. Maximin）を訪れた。同地は、マグダラのマリア[64]の頭髪をはじめ優れた布地（Bix）、その他の多くの遺品や大きな遺物、さらには見事な歴史的遺産があることで、知られている。

5月22日に、私は〔マルセイユから北東、約45kmに位置する〕サン・バウム（Sct. Baume）を訪れた。〔同地にも〕すばらしい聖遺物と若干名の聖職者を抱える教会がある。さらに同地は、マグダラのマリアが足を踏み入れたとの理由で、〔多くの人びとが〕熱心に訪問する場所であった。

5月22日の夕方に、私はマルセイユ（Marsiglia: Marseille）に行く。本当に、すばらしい都市である。同市には聖アンドレア（Sct. Andreas）、特に聖ラザロ（Sct. Lasarus）の頭蓋骨が極めて高価な純金で、さらに多くの〔宝〕石で飾られている〔箱の中に〕保管されていることが、またその他の多くの遺品も知られている。

5月23日と24日に、私はアサット（Assat）に行く。同地は、聖アンナ（Sct. Anna）[65] の頭蓋骨とその他の遺骨、そして多くの遺品で知られている。

5月25日に、私は〔アルルから北に約13kmに位置する〕タラスコン（Tarascon）へ行く。同地は聖マルタ（Scta. Martha）[66] で知られている。そして、夕方にアルル（Arles）に行く。

5月26日に、私は馬でサン・マリア・サラモン（Scta Maria Salamone）とジャコビ（Jacobi）に行く。

5月28日の真昼に、私はアヴィニオン（Avingnon: Avignon）に行く。

そして翌29日に、馬で同地を離れる。

6月1日に、私はリヨンに戻る。同地で、私は次の様な重要な書簡を受け取った。その書簡の文面とは、ヴェルザー商会の特権〔維持〕のた[S.12]
めに、私が〔以前〕拒否し、しかも社主アントーン・ヴェルザーさえも、私をもう派遣する気がないと語っていた、あのポルトガルのリスボン、マデイラ諸島そして〔カナリア諸島の〕ラ・パルマ島へ海路ないし陸路で商旅に出よ、という内容であった。

6月9日の真昼に、私は馬でリヨンからムーラン（Mulins: Moulins）、ブールジュ（Bruges: Bourges）そしてオルレアン（Orliens: Orleans）を訪ねた。

6月17日に、私は馬でパリに行き、同地で2日間滞在した。〔その後〕さらに馬でバランシェンヌ（Valencianisch: Valenciennes）を訪ねた。同地には美しい教会があり、また大きく、素晴らしい都市である。同地には洗礼者聖ヨハネの遺体が安置されている。――私はブリュッセル（Brissel: Bruxelles）へ行く。

6月23日に、私はアントウェルペンに行く。同地にはヴェルザー商会の3人の社員、すなわちコンラート・イムホーフ（Konrat Imhoff）、ウルリコ・ホノルト（Ulrico Honolt）そしてバルトロメオ・ヴェルザー（Bartolomeo Welser）ら[67]が駐在していた。そして同商会から私宛に〔再度〕「私がリスボン、マデイラ諸島そして〔カナリア諸島の〕ラ・パルマ島に赴くべし」との厳しい内容の書簡が届いていた。この件に関して、私はヴェルザー商会に、断固たる言葉で、不快なる旨の手紙を送付した。――〔間もなくして〕商会から私宛に返書が届いた。〔それは〕私が上記の諸地域に商旅すべき旨の内容であった。同商会は、〔以前、私と交わした雇用契約に関する〕確固たる誓約（Verstreten）[68]と約束を遵守しようとする気はないらしく、宣誓の上、上記の地域への商旅を私に要求してきた。

7月16日の真昼に、私は大きな不満を抱いて、しかも嫌々ながら、ア

ントウェルペンからベルヘン・オプ・ゾームに向かった。翌17日には、ミッデルブルクに移動した。7月19日には、私はフランドル（フランデレン）の立派な都市[69]を訪問するために、ブルッヘ〔ブルージュ〕に赴く。そして7月22日に、私は再びミッデルブルクに戻った。風は私にとって向かい風であった。翌23日遅く、私は〔ミッデルブルクの南、約7㎞に位置する、隣町の〕フリシンゲン（Flisingen: Vlissingen）に移動した。

7月25日（聖ヤコブの日）の早朝に、私は神の御名において、ビスケー船（bisgayer nave: das Biskaische Schiff）に乗って、フリシンゲンからゼーランド地方へ向かった。この船の船長はオットー・ア・ダロウンダ（Otto a Dareunda）なる人物であった[70]。この船は、あらゆる種類の風を、〔たとえば〕悪天候の風さえをも利用できる船である。したがって、私たちは素晴らしい船に乗船したことになろう[71]。8月2日まで、〔同船による〕船旅が続いた。

8月2日に、〔スペイン北部の〕ガリーシア（Galizia: Galicia）地方〔の陸地〕が私たちの目に入ってきた。しかし〔向かい風の〕南西風しか吹かなかったので、私たちはひどく苦しめられながらも、8月3日にようやく、サンタ・マルタ近くのフェロル（Ferreria: Ferrol）[72] に到着した。翌4日に、私は〔ガリーシア地方に位置する〕ビベイロ（Vivero: Viveiro）へ移動した。しかし同地でも好ましくない向かい風しか吹いていなかったので、私たちは8月12日まで同地での待機を余儀なくされた。同地は聖ヤコブ（サンティアゴ・デ・コンポステラ）の町から僅か12マイル離れた所に位置するのだが、私はある事を心配していたので、同市を訪問しなかった。

8月12日に、私たちはさらに船を進めて、ラステルに到着し、そして15日遅くにリスボンに到着した。

8月24日、25日そして26日に、私は馬でポルトガル国王の宮殿（Portgal kings hoff）のあるシントラ（Sintra）へ伺候した。そして9月8日まで、〔このリスボンで〕活発な商取引を行った[73]。

9月8日（聖母マリアの誕生日）に、私は聖なるミサを聞いた後、ガブ

リエル・アルフォンソ（Gabriel Alfonso）の船に乗船して、マデイラ諸島に向かい、9月13日に同島に到着した。私たちは、〔同島の慣れない風土病などで病死せず、無事〕リスボンに戻るために、カーポ・サンクト（Capo Sancto）で検疫を受けた[74]。私は同島のヴェルザー商会の代理商（Factor）[75] との取り引きを行い、さらに〔現地の〕あらゆる情況につい
[S.13]
て情報収集し、そして私に有利に事がはこぶように命じた。

9月17日の夜に、私はカスティーリャ〔スペイン〕国籍のカラベル船（ein Castiglanischen Caravel）でハンス・エンゲルホーフ（Hans Engelhoff）、ヤーコブ・ホルツボック（Jacob Holtzbock）、バルトロメウ・ケラー（Bartolme Keller）と、そしてその他の多くの労働者たち（Arbeiter）すなわち、親方衆（maister）と職人衆（diener）と一緒に乗船して、上記のマデイラ諸島から出航し、〔マデイラ諸島の1島〕ポルト・サント島（Porto Santo）を経由して、カナリア諸島のラ・パルマ島（Ilha de Palma de Canarisa: La Palma）へ向かった。そして9月21日の夜に、ラ・パルマ島〔のサンタ・クルス・デ・ラ・パルマ港〕に到着した。

9月25日に、私たちは〔同島の〕タッサコルト（Taza Cortt: Tazacorte）へ行く。この呪われた島の〔一角にある砂糖きび〕農場を、〔上記の〕社員ハンス・エンゲルホーフが購入していた[76]。

9月30日まで私は同農場に滞在した。〔もし〕私が同地に、長期にわたって滞在する場合には、〔同農場の経営が〕かなり上手くいくように〔再建〕しなければならないであろう。しかし、私は――そうあっては欲しくないのだが[77]――私が命じた〔農場を再建するという〕計画は、おそらく私が同島を離れれば、その後放棄されることを〔自分の経験から〕知っていた。〔農場に必要な〕水路（Wasserleiten）造設のために、大地を切り開く〔必要があるが、これには〕数年の年月を要する。〔しかし、私は〕その期間、この島に踏みとどまって、暮らしたくはない。そこで、私は昼間は土地を切り開いたり、小水路の建設を指導したり、また夜間は〔帳簿の〕計算と帳面付け〔経理〕をしたりと、休息もせず

に働いた。〔このことは〕私が冬の頃に、この島を離れる目的でした行為でもあった。私はハンス・エンゲルホーフを〔農場の〕監督官に任じ、他の多くの人々の監督ないし指導に当たらせた。

10月２日の夜、私は〔カナリア諸島の〕ラ・パルマ島の港からバルトロメウ・バサドーヌス（Bartolomeu Basadonus）の船に乗船して、上記のヤーコブ・ホルツボックと共に〔ラ・パルマ島を〕離れた。そして10月９日の夜に、私はマデイラ島に戻った。さらに翌10日に、私は陸路で〔同島の〕港町フンシャル（Fonschal: Funchal）[78] に行った。そこで私が見たものは、〔同島での〕ヴェルザー商会の２人の代理商レオ・ラーベスブルガー（Leo Ravesburger）とハンス・シュミット（Hans Schmid）[79] による経営が、不名誉なことに、上手くいっていないという事であった。〔これは〕私と上記のヤーコブの責任でもあるので、私たちは昼夜を問わず、出来る限り最善を尽くして、秩序（安寧と平和）を保ち、また〔私たちが来る以前の〕あるゆる事柄〔取り決めや慣行など〕を無効にした。そして、私は上記のヤーコブ・ホルツボックを監督官（Obersten）に任じ、彼の監視下にレオとハンスを置いた。〔その結果、この２人からの〕かなり長期にわたる大きな抵抗が、また守備隊長や行政（経理）官（Capitan u. Contador）に対する要求が、また大きな不法行為（gross unrecht）が発生したのみならず、彼らは私たちにもひどい暴力（hell gewalt）を振るった。〔そこで〕

10月22日に、私はマデイラ島のもう１つの港町マチコ（Machiquo: Machico）[80] に対して重大な警告（ein gros alermo）を発し、かつ〔非常〕手段（aufgleff）に訴えた。しかし、〔兵力に乏しい〕私〔たち〕は武装した兵士と火器などを備えた3隻の船の支援を受け、名誉を汚さず（an edlen: mit Ehrem）撤退した[81]。

10月25日の早朝、私は上記のマチコの港から小型のガレー船（ein clain barinel: Ruderschiff）で[82]脱出し、〔味方を再結集して〕敵対者たちを打ち負かし、名誉を保った。しかも、私はすべての船乗りたち（al schiffleit）を私の船に乗せていた〔＝味方につけていた〕ので、私は敵

対者を恐れることなく、〔私に有利な条件で〕彼らと和解した。

10月31日に、私たちは激しい暴風を利用して、リスボンへの帰途についた。その航海の途中、空が大変暗かったので、私たちは自分の命(生存)そのものを心配した〔ほどであった〕。そして陸地が〔どの方向にあるのかも〕分からず、〔したがって〕私たちが〔リスボンの外港〕カスカイス港に到着するまでは、どこへも寄港できなかった。まだリスボンで〔は疫病が流行していたので、疫病で〕死亡する可能性があったため、私はリスボン市内に〔直接〕入ることを望まず、〔その代わりに〕私たち〔のヴェルザー商会〕の住居がある〔市郊外の〕アルバラーダ(Alavalada: Alvalada)〔リスボン市内の北部に位置〕に馬で乗り付けた。[S.14]

しかし、平日には市内に来て、――私が理解していたかぎりでは――リスボンでの私たちの支店長(Oberster)たる私のすぐ下の弟のハンスと行動を共にし、取り引きをし、そして指図を出していた。〔今回の〕私のリスボンでの主要な任務は、ヴェルザー商会とポルトガル国王との東インド貿易をめぐって生じる、またマデイラ諸島やアソレース諸島などでの砂糖(Zucker)などをめぐって生じる、係争や異議申し立てを解決することであった[83]。

11月25日(聖カタリーナの祝祭日)に、私は馬で上記のアルバラーダからサンタ・カタリーナ(St. Catarina)に行くことを望んだが、〔途中の山の〕下り坂で、私が乗っていた馬が騒ぎに驚いて、私を振り落とした。〔同時に〕私も鞍を固定しようとしたため、馬もあおむけに倒れた。〔しかし〕不思議なことに、私には何らの被害もなかった。〔この事実について〕私が言えることは、「まさにこの日を境に、私は新たに生まれ変わった〔気持ちになった〕」ということである。

12月5日に、私はポルトガル国王の宮殿(離宮)が存在したアルメリン(Almerin)とサン・エルレン(Sct. Erren)に赴いた。同地で、私は〔商取り引きに関する〕法律やその他の案件のために、非常に様々な仕事をこなしていた。つまり〔上記の〕2ヵ所の王宮所在地に滞在し、あ

る時はこちら、ある時はあちら、と〔忙しく振る舞って〕いた。私は辛うじて恵み深き国王〔マヌエル１世〕に謁見できた。しかも、しばしば謁見が許されたので、私は毎日、多くの時間を、――とは言っても、国王は午後になるとおひとりで、王妃の許にお渡りなさっていたのだが――国王と共有していた〔かのような錯覚に陥る〕ほどであった。〔ここリスボンには〕インドからの船も来航していたし、またここからインド向けの艦隊（Arrmad）も出航していた[84]。〔東インド交易に関する〕助言、相談（Retten: Beratung）[85] の際には、ポルトガル国王はしばしば私を召しだし、諮議（しぎ）した。〔このことは、国王が〕私に大きな愛〔信頼感〕をお示しになっている〔からに他ならない〕[86]。

（第２章(D)へ続く）

（注）

(1)　この当時、ヴェネツィアは南ドイツの若き商人の学校と認識されていた。J・クーリシャー／増田四郎監修（伊藤栄・諸田実訳）『ヨーロッパ中世経済史』（東洋経済新報社、1974年）467ページを参照。

(2)　このハンス・プフィスターなる人物はおそらく定期的な郵便配達業者の１人であったと思われる。しかし、この時代には、ここアウクスブルクには、毛織物を商い、そしてヴェネツィアと定期的に交易していた極めて有力な商人家系プフィスターも存在していた点に注意すべきである〔原注20〕。

(3)　これはヴェネツィアにあるヴェルザー商会の２つの支店であった〔原注21〕。

(4)　さしあたり、イタリア語を学ぶためであった〔原注22〕。

(5)　このウルリヒ・エーインガーはアウクスブルク生まれの人物である〔原注23〕。

(6)　Schuldbuch［債務帳簿］――この中には、すべての現金での収入と支出（Einnehmen und Ausgaben）そして債務［借方］および債権［貸方］での全ての、そして個々の未払い額が記載されている。全能なる神は私に、ありがたいことに、この〔商業的〕才能をお授け下さった。1522年。

Janal［仕訳帳］――この中には、私が、私の主人のために取り引きした諸々のものが――例えば、収入と支出、債務、為替、現金の受領、商品の発送、購入そして売却など例外なく――記載されている。神は私に、ありがたいことに、この〔商業的〕才能をお授け下さった。1522年。

Cappus［商品帳］――この中には、商品の預かり、発送、購入そして売却、さらに商品の在庫量など全ての事が、さらには個々の商品に関して生じた利益や損失なども記載されている。1522年。

以上のことを、当地の管区・市立図書館に存在した1522年の３種の会計簿のそれぞれの表題が伝えている〔原注25〕。

(7)　父親ルーカス・レーム２世（1438～1496年）については、第１章［本誌第10号の153ページ］を参照のこと。また彼は1480年以降、アウクスブルク市で納税者リストに記載されだす。

その財産は3,000グルデンとなっていた（M. Häberlein, J. Burkhardt（Hg.）*Die Welser*, Berlin 2002, S. 106）。

(8)　クリストフ・ヴェルザーは下記のアントン・ヴェルザーの長男である（*Die Welser*, S. 107）。

(9)　アントン・ヴェルザーについては、*Die Welser*, S. 106–107, S. 161 などを参照のこと。

(10)　ヴェルザー商会は、ミラノに、アウクスブルク出身のアントーン・ラウギンガーが取り仕切る支店を所有していた〔原注26〕。

(11)　ヴェルザー家はリヨンをきわめて重要な拠点と位置づけ、この当時、その支店には生粋のアウクスブルク人たるナルシス・ラウギンガーを支店長に任命していた〔原注30〕。また15世紀前半のラウギンガー家はネルトリンゲンの指導的な大商人であった（*Die Welser*, S. 103–104）。

(12)　注(6)を参照。

(13)　この語は、現代語では Kargaheit und Geiz［けち／吝嗇］の意味である〔原注33〕。

(14)　この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従った〔原注34〕。

(15)　当時の商人の間では、交易がどのように営まれていたのかを商人自身が実際に理解していたかどうかに、すべてがかかっていた。交易活動や世情（人情）の知識を正しく理解する眼力こそが、当時の有能な商人であるための第1条件であった。ヴェネツィアでの商品購入には非常に多くの手続き（慣行）が必要であり、また15世紀には、この件をめぐって、独自の料金／税率帳（Eigene Tarifbücher）が作られるほど、遵守しなければならない多くの事が存在した。おそらく、グライフは後でそのような事を伝える機会を持つであろう。事実、同「日記」の執筆者たるルーカス・レーム 3 世自身が、兄弟たちと一緒に会社を設立した1518年に、この件に関して、言及していたことを目にするであろう〔原注32〕。

(16)　この時代の貨幣史については、久光重平『西洋貨幣史・中』（国書刊行会、1995年）の第65章「16世紀のフランス」（784－798ページ）を参照。

(17)　このヴェルザー＝フェーリン商会の誕生は、1479年にアントーン・ヴェルザー（28歳）がカタリーナ・フェーリン（Katharina Vöhlin）と結婚したことによる。またアントーンがフェーリン商会の本拠地メミンゲンに移住し、義理の父親ヨハン・フェーリンの商会へ参加したことは、共同経営以上の結びつきをもたらす結果となった。もちろん、この結婚の背景には、フェーリン家側の後継者問題があった。同家には親族はいるものの、彼らは経営能力を欠く者やまだ幼すぎて経営の任に耐えない者たちであった。そこでヨハンは自分の娘カタリーナの婿を取り込むことで、フェーリン商会の経営的安定を画策したのであった（*Die Welser*, S. 145–157）。

(18)　当時の大会社は一般に 3－4 年という複数年度での損益を算定していた。その変化額に従って、貸借対照表、すなわち総勘定が確定され、また原資（資本）と呼ばれる会社の出資との関係から、個々の投資家の損益が決定された〔原注35〕。

(19)　個々の支店（代理店）の勘定書がアウクスブルクの本店（Das Stammhaus）へ送付され、それからこれらの勘定書を基に総勘定書（Generalrechnung）が作成された〔原注37〕。

(20)　アルビジョワ地方とは、トゥールーズ（Toulouse）とロデズ（Rhodez）間に位置する南フランスの高地ラングドック（Hochlanguedoc）地方であり、サフランの豊富な地方である。当地でサフランを購入するためには、人々は10月 8 日までに当地に到着していなければならなかった。当地で購入されたモロッコ産のサフランのうちで最高級品質のそれは、ミラベル（Mirabel）とカサル・ノダリー（Casal nodarii）であった。

——それ以外の種類のサフランは、以下のごとし。

(1)カタロニア産（スペイン産）のサフラン：最高級品と見なされている。

(2)アキレイア（Aquileja: Adler）産のサフラン：チーマ（Cima）と呼ばれていた。

(3)アラゴン産（スペイン産）のサフラン

(4)ピルイシャー（Piluischer）産のサフラン

(5)モロッコ（Morackhini）産のサフラン

(6)アベルニシャー（Avernischer）産のサフラン

いたる所でサフランの生産が不作であった1535年には、アキレイア〔イタリア北部のフリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州〕地方では、サフランは1ポンド（500グラム）当たり28〜32カルリーノ貨（Carlini）で、またカタロニア地方では50〜64カルリーノ貨で購入されていた。――なお、11½カルリーノ貨は1ドゥカート金貨に換算された。また、バリ〔イタリア南部のプーリア州〕地方では、サフラン1梱ないし1俵（Balle）は240ポンドの値がついた。

ヴェルザー商会とイムホーフ商会（Die Imhof）は、〔イタリア南部地方の〕バリの女大公から特許状を獲得し、他の商人たちより低額の関税（Douane）を支払うだけでサフランを手に入れていた。両商会はミラノ出身の商人と同じ立場にいた。この商品は極めて高価であったために、それぞれの偽造商品は厳しく取り締まられた。1492年には、そのため、サフランの紛い物は焼却処分された。サフランの主要な取り引き商人は、ヴェルザー商会とイムホーフ商会であった。アウクスブルクの有名な年代記作家ゼンク（Zenk）は次のように語っていた。すなわち、「1430年にフス教徒たちがニュルンベルク人たち〔が所有するサフランの価値〕を約1万グルデンと評価した時、私はまさにそのニュルンベルクに滞在し、そして私はモロッコ産のサフランを4ツェントナー（Centner）ほど所有していた。それゆえ、私はその価格の下落を恐れた」〔原注38〕。

(21)　ヴェルザー商会の事業は、飛躍的な拡大の様相を示していた時でも、非常に組織化されていた。同商会は主要な支店と副次的な支店から成り立っていた。リヨン（Lyon）は主要な支店であり、ジュネーブ、フライブール、ベルンなどの各支店はリヨン支店の傘下に組み込まれていた。これらの各支店の勘定書はリヨン支店に送付されることになっていた〔原注40〕。

(22)　この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従ったが、彼自身も、①いわゆるアントンファイアー〔麦角中毒症（das sogenannte Antonierfeuer）〕と関係あるのか、それとも②大規模な火災について言及しているのか不明である旨、胸中を吐露していた〔原注42〕。

ただし、H・シッパーゲスによると、この病気はレプラ（癩病）、ペスト（黒死病）と並んで第三の疫病として猛威をふるったそうである。なお、この「アントニウスの火」の正確な現代病名は「壊疽性麦角中毒」（エルゴテイスムス・ガングラエノスス）である。この病の症状やその流行報告については、H・シッパーゲス（大橋博司／濱中淑彦他訳）『中世の医学――治療と養生の文化史』（人文書院、1988年）の93－100ページを参照のこと。

(23)　この点については、U・イム・ホーフ（森田安一監訳）『スイスの歴史』（刀水書房、1997年）69－80ページを、また森田安一『物語スイスの歴史』（中公新書、2000年）89－93ページを参照のこと。

(24)　この箇所（wunderperlich überpolden dz groß hertz guoter wil die Krankayt.）はいくぶん簡潔な表現のため、編者B・グライフにもその意味が不明である〔原注44〕。

(25)　このシモン・ザイツ（Simon Seitz）〔彼の名前は、スペイン語ないしポルトガル語の綴りではSimon Seyesである〕は、「日記」の執筆者たるルーカス・レームそしてスキピオ・レーヴェストーン（Scipio Leveston）〔彼の本来のドイツ名はレーヴェンシュタイン（Löwenstein）である〕と一緒にヴェルザー商会に仕えていたが、かなりの虚弱体質のために、またそのために〔将来を〕絶望して、1521年7月4日に、アラゴン王国のキビタス・カエサルアウグスタ（civitas Caesarsugusta）、つまりサラゴーサで遺言状を作成した。彼は生粋のアウクスブルク人であり、彼が死亡した時、妻と4男5女が遺されたが、娘たちは、バーバラ（Barbara）を除く〔全員が〕当地の修道院で、たとえば、聖カタリーナ（St. Katharina）や聖ニコラウス（St. Nicolaus）などで、修道女として生涯を過ごした。当地の図書館に残されていたコンラート・ポイティンガー博士（Dr. Conrad Peutinger）〔1465－1547年〕の論文の

中に記載されていたこの者〔シモン・ザイツ〕のラテン語で起草された遺言状に、彼自身が次のように記していた。すなわち、「自分は旧アレマン地方のアウクスブルク市に家を持つも、現在はアラゴン王国のキビタス・カエサルアウグスタ（サラゴサ）市に居住している商人〔である〕」と。

このシモン・ザイツは――彼は1503年に、ポルトガル国王の命で Simon Zaiz と改名したのだが――1503年にポルトガル国王マヌエル１世（Emanuel）〔在位：1495－1521年〕に、以下の事を要請した。すなわち、①リスボンに商館を建設し、また②リスボンで交易を営むことができるような契約を国王と取り交わしたドイツ人商会の名で、メーレン出身の人物たるヴァレンティン・フェルディナンド（Valentin Ferdinand aus Mähren）を代理商（Coretor）として、また彼らの交易の仲介者として任命することを要請した。この人物は同時に、ドイツ人〔商人〕が締結した取り引きでは、公証人（Notar）でもあった。このことは、おそらく、〔当地の〕言葉にまだ精通していないドイツ商人が彼を彼らの取り引きで通訳者（Dolmetscher）として、また仲介者として雇用することをも意図した。このヴァレンティンはコンラート・ポイティンガー博士と学識のある書簡の交換をしていた。その他に、シモン・ザイツは、遺言状に従えば、アウクスブルク市の近くに、すなわち、〔同市の北、6 kmに位置する〕ゲルストホーヘン（Gersthofen）に相当な財産と土地（Vermögen und Güter）を残した。

グライフは、このシモン・ザイツは1523年にもまだ存命していたと考えている。何故なら、私たちの〔アウクスブルク市〕の年代記には、次のように記されていた。すなわち「〔1522－23年〕のニュルンベルク帝国議会で、帝国諸身分（Reichsstände）は、海路（河川）ないし陸路で神聖ローマ帝国に入国、ないし同帝国から出国するすべての商人に、100グルデンの価値物に対して４グルデン〔４％の課税率〕を支払う義務を課する旨、決議し、この措置をさしあたり10年間とする、と。また、彼ら帝国諸身分は、一般個人（man）による交易の禁止をも決議した。しかも、会社（Compania）が交易を行う場合は、その会社は５万グルデン以上の取り引きをしてはいけないし、また３つ以上の外国支店の所有禁止などをも決議した。しかし、帝国都市は帝国諸身分への関税〔支払い〕を承諾しようとはしなかった。

ニュルンベルク帝国議会後の1523年に、帝国都市は関税をめぐって、彼らの使節をシュパイヤーに派遣した。つまり、帝国都市は関税をめぐって、４都市――すなわち、マインツ、ストラスブール、アウクスブルクそしてニュルンベルクの４帝国都市――の代表者をスペイン宮廷にいる皇帝カール５世の許に派遣した。アウクスブルク市はシモン・ザイツと呼ばれる商人と裁判所書記を派遣した」と。

シモン・ザイツは1526年に死亡したように思われる。その理由は、1526年５月17日に公証人（Notar）が1521年７月４日に作成した彼の遺言状に初めて印章をつけ、この遺言状を正当なものと宣言したからである。この遺言状の証人として、以下の者たちが記載されていた。すなわち、サラゴサの商人と市民たるミヒャエル・コリータ博士（Dr. Michael Corita）、ヨハネス・ブクル・メテリン（Joannes bucle Metelin）、当時サラゴーサに居住していたヨハネス……アプ・ラーベンスブルク（Joannes. . . ab Ravensburg）そしてハインリヒ・エンガー・フォン・コンスタンツ（Heinrich Enger von Constanz）である。cf. Dr. Fr. Kunstmann, Valentin Ferdinands Beschreibung der Westküste Afrikas etc. im VIII. Bd. Abteilung I. der Mitteilungen der k. b. Akademie der Wissenschaften in München. S. 221 u.ff.〔原注45〕。

(26) 両国の対立は、イタリアをめぐるイタリア戦争の一環である。これは、1494年にフランス軍のイタリア侵入が発端であり、その後はハプスブルク家とフランスのヴァロア家との間でのヨーロッパ大陸での覇権をかけての対立に発展した（成瀬治監修『カラー世界史百科』、平凡社、1978年、224－225ページ参照）。

また、イタリアを舞台としたこの激動の時代（1492～1534年）を、またヨーロッパ国際政治を、「イタリア」側から叙述したものとして、F・グイッチァルディーニ（末吉孝州訳）

『イタリア史　I–IX』（太陽出版）――〈現在も継続刊行中〉――を参照のこと。それは、グイッチァルディーニが叙述した時期が、まさにルーカス・レーム３世の生涯の時期に符号し、また当時の国際政治状況が記されているからである。

(27)　フィリップ１世（美男王）については、川成洋『図説スペインの歴史』（河出書房新社、2002年）の第６章「スペインの黄金時代」（46－55ページ）を、前掲『カラー世界史百科』、225ページなどを参照。また、西川和子『狂女王フアナ』（彩流社、2003年）をも参照。

(28)　地元産にはモロッコ産サフランも含まれる〔原注47〕。

(29)　ザウム（Saum）とは駄獣の積み荷（荷駄）の意味である。たとえば、ヴェネツィアでは、コショウ１ザウムは16ツェントナー（Zentner: 1 Ztr.＝50kg）の重量であり、またアキレイア（Aquileja: Adler）では、サフラン１ザウムは５ツェントナーであった〔原注46〕。

(30)　当地の豪商（フッガー家やヴェルザー家など）は15世紀末ないし16世紀初期の大発見に大きな注意を払い、そしてこの大発見をまもなく利用しようと努めていたことは、同時代のアウクスブルクの年代記やさらには同「日記」に添付され、かつアウクスブルクの図書館に保存され、そしてコンラート・ポイティンガー博士によって収集されていた書簡や報告――〈これらは、すべて、東インド交易、インド航路の発見そしてインドまでの旅行記などと関係していたものである〉――などが証明している。「コンラート・ポイティンガー博士の生涯と功績の歴史」（F. A. Veithg, *Historia vitae atque meritorum Conradi Peutingeri*）の中の113ページに記載されている。

たとえば、C・ゼンダー（Clemens Sender）は彼の年代記の、1503年の箇所で、次のように記していた。すなわち、「ヴェネツィアからアウクスブルクへ、香辛料を積んだ23隻の商船がどのようにしてインドのカルカッタからリスボンへ到着したかを記した書簡が届いた。この航海を企てたのはポルトガル国王であった。なぜなら、同国王は長年にわたり多大な労力と資金を費やして、香辛料が生育しているカルカッタまでの航路を探し求めていたからであった。この行為はほとんどヴェネツィア人に敵対するものであった」。

1502年に、幾人かの商人――おそらく、ジェノア人――たちが、ポルトガル国王によってインド向けの航海のために装備を整えた船舶のうちの２隻を、対価を支払って、借り受けた。その際の条件は、航海中、商人たちに緊急事態が生じた場合、国王はこれらの商人たちを自分の兵隊ないし勤務者として保護する、というものであった。これらの商人たちは、インドでの商品購入に必要以上の現金を持参するそうである。彼らが無事帰国した場合には、彼らは、前もって約束させられていたものを、すなわち、〔インドで購入した〕あらゆる商品の半分を、国王へ支払う義務を履行しなければならなかった。

1503年には、この〔無事、帰国した場合、インドから運んできた全商品の半分［税率50％］を支払う義務〕条件は次のように変化していった。すなわち、インド航海に参加した者は誰であれ各個人は国王に、利益100グルデンにつき40グルデン［税率40％］を支払うこと、また船舶を国王から買い取ること、そして国王にそのために要求された金銭を航海前に、しかも現金で支払いこむことなどが義務となった。つまり、各人は自己責任（危機責任）で旅行にでることになった。もし商人たちが入手した船に彼らの代理人を乗せている場合には、この代理人たちはおそらくインドでの香辛料の買い付けに立ち合っていたにちがいない。しかし、この取り引きで国王が親方（Meister）であり、またあらゆる事件においても主人（Herr）として振る舞うためにも、ただ国王の部下だけが商人の費用で取り引きを行うことができたのである。また商人は国王の代理人から香辛料をすべて購入しなければならなかった〔原注51 u. 52〕。

(31)　したがって、シモン・ザイツとスキピオ・レーヴェンシュタインはもはやリスボンにはいなかったにちがいない。おそらく、ルーカス・レーム３世は彼らの任務を解いていた。彼らは、もしかしたら、ポルトガルの船舶でインドに向かっていたのかもしれない。グライフはこの件について、詳しい事は知らない。しかし、確かなことは、ヴィル（Vils）出身のバ

ルタザール・シュプリンガー（Balthasar Springer）とハンス・マイヤー（Hans Mayer）〔彼については、注(32)を参照〕はヴェルザー商会の代理人として、3月25日にリスボンから出航したインド遠征に参加していたことである〔原注50〕。

(32)「日記」の執筆者たるルーカス・レーム3世は〔船がインドへ向けて〕出航した年を誤っている。この出航の年は1504年3月25日ではなく、1505年3月25日である。しかも、副王フランシス・アルメイダ（Franciscus Almeida）の艦隊（die Flotte）と共に出航した。つまり、彼、フランシス・アルメイダは1505年3月2日に30隻の船舶〔軍艦（Schiffen）〕と6隻の軽快な3本マストの帆船〔カラヴェル商船（Karavelle）〕を伴って、リスボンからインドへ出航した。ルーカス・レーム3世の誤記は、当地アウクスブルク市の古文書館で見つかった、コンラート・ポイティンガー博士の1505年1月3日の書簡からも明らかである。この書簡は皇帝秘書官ブラシウス・フェルツル（Blasius Hölzl）に宛てられたものであり、その中で、ポイティンガーは同秘書官に要請していた。すなわち、

「ポルトガル国王の船団がインドに向けてまさに出航しようとする時に、私の義兄弟〔C・ポイティンガー博士の義兄弟であるバルトロメウ・ヴェルザー（Bartolomeu Welser）〕宛ての書簡は書き上げられよう。〔この船団の〕出航は、私たちアウクスブルク人にとっては、私たちアウクスブルク商人がインドを訪問した最初のドイツ人であるという、大きな名誉をも意味する」。

C・ポイティンガー博士も、この件について、「食卓の話について（Sermonibus Convivalibus）」の中で、次のように語っている。すなわち、

「インドへ出航したルシタニア〔ポルトガル〕出身の貿易商について（De Lusitanis nautis）多様な話が私たちの許に届いていた。すなわち、大海、またその海の干満に関する話と並んで、〔たとえば〕インドから香料とその他の商品を私たちにもたらした、最も資金力のあるルシタニア〔ポルトガル〕国王のインドへの確実な航海などの話が。そこで、私たちは程なく、私たちの不屈な〔神聖ローマ〕皇帝の命に従い、そしてルシタニア〔ポルトガル〕国王の賛同〔許可〕を得て、私たちアウクスブルク人たちが将来、自分たちの船で、また商品〔買い付け〕のために、インドへ赴くことを希望する。達成されれば、驚嘆に値することである！」

これらのアウクスブルク商人たちは、バルタザール・シュプリンガーが著した『航海（*Meerfahrt*）』から知られるように、「フッガー家、ヴェルザー家、ヘーヒシュテッター家（Hochstetter）、ヒルスフォーゲル家（Hirsvogel）、イムホーフェ家（Imhoffe）など有力商人たちである」。

このバルタザール・シュプリンガーはヒルス（Fils）出身者であり、そして1505年3月25日にリスボンから出航したインド向けの船隊と共に船旅に参加した人物であり、かつ彼は自らを「ヴェルザー家の雇われ者（einen Bestellten der Welser）」と呼んでいる（彼の著作は、H. Burgkmair の木版画が刷り込まれた、古刊本である）。

以上のインドへの出航報告書から、ルーカス・レーム3世が記した1504年・1505年が誤記であることは明らかである。なお、その報告書に従えば、ドイツ人が借り受けた船舶はセント・ラファエル号、セント・ジェロニモ号そしてリオナルダ号の3隻であり、この3隻はルーカス・レーム3世が誤って報告した1505年ではなく、1506年5月22日に帰港したことになる。

最後に、私は〔1505年と1506年に関する〕自分の主張の正しさの根拠として、1505年にフランシス・アルメイダが行ったインド遠征に個人的に参加し、かつこの件に関して「日記」を残したハンス・マイヤー（Hans Mayer）というドイツ人の報告書を挙げておく。彼は1499年当時、ベイルート〔レバノンの都市〕やカイロに滞在し、そしてここからアデン〔アラビア半島南端のイエメンの都市〕に向けた商旅を企てた人物であった。〔なお、この箇所で言及しておこうと思うのだが、ウルシュテッター・フォン・アウクスブルク（Ulstetter von Augsbug）はカイロとアレクサンドリアに独自の代理商を抱えていたが、おそらく、このハ

ンス・マイヤー自身はこの代理商であったのではないだろうか。〕このハンス・マイヤーは、注(25)で言及したヴァレンティン・フェルディナンドの友人の1人であった。それ故に、私はマイヤーがこの友人から誘われて、ヴェルザー家〔商会〕の仕事として、インドへの商旅を企画した、と推測している。ハンス・マイヤーの「日記」――〈この日記はミュンヘンの宮廷＝王立図書館に、マニュスクリプト（手稿）として残されており、その後クンストマン教授（Dr. Kunstmann）によって出版された〉――に従えば、彼は代理店の記録係（Scriva da Feytoria）としてセント・ラファエル号に乗船し、そして航海記（das Schiffstagebuch）を記録していた。彼もまた「20隻からなるアルメイダ船隊は1505年3月25日にリスボンを出航し、そしてそのうちの5隻〔の5隻は船長フェルナンド・ゾアレス（Fernando Sozrez）の指揮下に置かれていた船舶〕が香辛料を満載して、1506年5月22日に帰国した」と記してある。

1503年頃からヴェネツィア貿易が衰退する一方で、逆に、アントウェルペン貿易が発展した。この点に関して、グイッチャルディーニ（F. Guicciardini）は次のように報告している。すなわち、

「アントウェルペンを大規模で、立派な、そして有名な都市にした著しい発展は、おおよそ1503年と1504年頃から始まった。これらの年は、ポルトガル王国がその直前にすばらしい船団と周到な準備のもと、インドのカリカットを攻撃して、当地の王と〔交易〕協定を結び、やがて香辛料や薬草をインドからポルトガルへ、さらに続いてアントウェルペンの市場や大市（メッセ）などに運送し始めた年であった。それ以前は、いかなる香辛料や薬草も紅海を経由してベイルートやアレクサンドリアへ、そしてヴェネツィア商人を介してヴェネツィアへ運ばれた。その後、イタリア、フランス、ドイツそしてその他の国々へ、さらには辺境のキリスト教世界へと運ばれたのであった。しかし、1503年と1504年以降は、ポルトガル人がこの役割を担い、しかもアントウェルペン〔の市場〕に直行させたのであった。ポルトガル国王がアントウェルペンへ差し向けた国王の代理商が徐々にドイツ人――初めは、フッガー家、ヴェルザー家そしてヘーヒシュテッター家――を引き寄せたのであった」、と〔原注 51 u.52〕。

なお、この点については、グイッチャルディーニ（末吉孝州訳）『イタリア史・III』（太陽出版、2002年）、第6巻－9章（207－213ページ）をも参照のこと。

(33)　この3隻は、注(32)や以下の本文からも明らかなように、セント・ラファエル号、セント・ジェロニモ号そしてリオナルダ号の3隻である。

(34)　「日記」では、クルキアティ貨幣の代わりに、†が使用されている。この十字架はクルキアティ貨幣を意味する。クルキアティ貨幣とは、その裏面に十字架が彫られたドゥカーテン金貨（Dukaten）であり、インドで唯一通用していた貨幣である。この年のインド遠征には、ヴェルザー家以外にも、フッガー家、ヘーヒシュテッター家、ヒルスフォーゲル家などが参加していたが、これらの各商会もおそらくヴェルザー家以上の多額な金銭を投資したと思われるので、アウクスブルク商人はこのインド遠征に〔全体では〕途方もない金額を投資していたにちがいない〔原注53〕。

(35)　注(32)を参照のこと。

(36)　おそらくポルトガル人が東アフリカのモンバサ島（Monbasa）とキルワ島（Quiloa: Kilowa）を征服した際に略奪した2万2,000クルキアティ貨の分け前についてであろう。ドイツ商人たちはその金銭のうち、しかるべき額は自分たちの取り分であると主張していた。もちろん、ポルトガル人はドイツ商人の主張を否定していた〔原注54〕。

(37)　このような条件での交易にもかかわらず、ドイツ商人たちが大きな利益を手にしていたとしても、もし以下の事実を考慮するならば、何ら不思議ではない。それは、この当時すでに、アレキサンドリアでは生姜（Ingwer）1クインタール（Quintal＝100kg）はカリカットの3倍の価格で売却されていたし、また乳香（燻香：Weihrauch）1クインタールは5倍の価格で売却されていた、という事実である（cf. Peschel, Geschichte des Zeitalter der

Erfindungen, S. 27 sqq)〔原注55〕。

なお、インド航路開設まもない1506年のポルトガルの海外貿易から得られる富が莫大であった事については、金七紀男『ポルトガル史』(彩流社、1996年)の103－104ページを参照のこと。

(38) メンデス一族の1人、ソエイロ・メンデス(Soeiro Mendez)はアルフォンソ5世の治世期(在位:1438－81年)にアルグイム(Arguim)に城砦を築き、その城砦の終身城主になっていた〔原注56〕。

(39) このトリスタン・デクンハは1505年ではなく、1506年7月にアルフォンソ・アルブクエルク(Alfons Albuquerque)と共に出帆した。しかし、彼は途中、マダガスカル島に寄港するために、アルフォンソを見捨てた。しかし、向かい風が吹きはじめ、そのため、定刻にインドに到着することが困難になった。この、計画になかったマダガスカル島訪問で、同僚船が2隻沈没した事が、彼が行った「暴力」である。そしてルーカス・レーム3世は、彼が自分の船を〔マダガスカル島〕発見のために派遣したと語っている(cf. Maffei Storia Indica Lib. XVI.)〔原注57〕。

(40) フレッテ・エト・ディエット(Frette et dietto)とは、商品が以下のような条件でポルトガル国王の船舶に積み込まれる〔輸送契約〕である。条件とは、船舶利用料と乗組員の食料費〔人件費(Verköstingung)〕の60%を支払うという義務を引き受けることである。交換商品としてインドへ輸出された物は、たとえば、「国王がチュニス(Tunis)から持ち運ばせた様々な色の食料品、絨毯、織物、銅製の蒸し風呂、鉢、平皿そしてその他の諸々の物(Panni varii coloris, quos ex Tunis rex facit apportari. Item tapetes, tela, caldarii cuprei, pleves, patera noster et alia infinita genera)」(cf. Dr. Kunstamann Entdeckung der Guinea)。東インドへの新しい海路の発見により、ドイツ人の対ヴェネツィアそしてジェノア交易は大きな衝撃を受けた。従来の、アウクスブルクやニュルンベルクによって運営され、そして両都市に莫大な富をもたらしていた活発な仲介交易が衰退した。その後は、両都市はリスボンやアントウェルペンと結びついた〔原注58〕。

(41) ペストについては、さしあたり、二宮宏之／樺山紘一／福井憲彦編『医と病い』(新評論、1984年)の第2章「黒死病をめぐって――14世紀の歴史における飢饉と疫病」(51－96ページ)を、またH・シュパーゲス(大橋／濱中共訳)前掲書の84－92ページを参照のこと。ドイツ各地での状況については、Jankrift, kay peter, *Krankhaeit und Heilkunde im Mittelalter*, Darmstadt 2003, S. 77–105を、またノーマン・F・カンター(久保儀明／楢崎靖人共訳)『黒死病――疫病の社会史』(青土社、2002年)などを参照のこと。

(42) この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従った〔原注63〕。

(43) そのような収益はリスボンにあるインド商館(Indiahaus in Lissabon)でのみ得ることができた。それは、すべてのインド産香辛料がこの商館に持ち込まれたからである〔原注64〕。

(44) In Voltas fahrenとは、kreuzen［乗り越える／乗り切る］の意味である〔原注66〕。

(45) この海賊モンドラゴン(Mondragon)については、オロシウスの書(第4章:Orosius Lib.VI.)に、次のように〔ラテン語で〕記されている。

「この［1508］年に、モンドラゴンと言うガリア人［フランス人］が海賊たちと共に［東］インドから戻って来る商船を拿捕した。〔ポルトガル国王〕マヌエル1世(1495－1521年)は使者を遣わし、この不正行為〔拿捕行為〕についてガリア(フランス)王国へ抗議し、〔拿捕された〕商船とその積み荷〔アジアの産物〕を共にポルトガル〔王国〕へ返却するように要請し、かつ〔他の〕4隻の商船の返還をも要求した。その任を負わされた人物が、オズアルト・パキエクス(Oduardus Paciecus)であった。このパキエクスは迅速に行動し、モンドラゴンを攻めたて、国境近くのカッライカ(Callaica)という海岸で彼の船を攻撃し、戦闘を敢行した。すなわち、両陣営は激戦を演じた。しかし、パキエクス陣営は海賊船の1隻を撃沈させ、3隻を捕獲し、また拘束した海賊たちを国王マヌエル1世の許へ連

行した。モンドラゴンは国王の商船から奪った財産を返却し、そして自ら、いつでもマヌエル１世の最も卑しい下僕である旨を、かつ以後決してルシタニア人〔Lusitania： イベリア半島の西部（ポルトガルを含む）地方の住人〕たちのいかなる者にも〔あのような〕暴力行為を働かない旨、約束した。こうして、囚人たるモンドラゴンは放免され、そして彼の祖国〔フランス〕に帰国した」〔原注70〕。

ドイツ人海賊については、R・レディース編（宮内俊至訳）『海賊ヴィンターゲルストの手記』（NTT 出版、1996年）を参照のこと。ただし、この海賊は17－18世紀初期（1688－1710年）に活躍した、南ドイツ・メミンゲン出身者であった。

(46)　このウィルヘルム・マルチンはおそらく、ヴェルザー商会の代理商であったと思われる。少なくとも、後代のシュテファン・マルチンとサルヴァトール・マルチン（Stephan u. Salvator Martin）は、ヴェネツィアでのヴェルザー商会の代理商であった（cf. Klunzinger, Antheil der Deutschen etc.）〔原注71〕。

(47)　Barel や Barinel は小型船である〔原注72〕。なお、アティリオ・クカーリ／エンツォ・アンジェルッチ（堀元美訳）『船の歴史事典――（コンパクト版）』（原書房、2002年）の「大洋の征服」（57－83ページ）をも参照。

(48)　Tunes in England とは、今日のイギリスのダンジネス岬（Dunge Ness）である〔原注73〕。

(49)　この箇所の訳は、同「日記」の編者たる B・グライフによる解釈に従った〔原注74〕。

(50)　砂州［浅瀬］は航路標識を建てたり、目印として、一般には樽を浮遊させて注意を喚起していた〔原注75〕。

(51)　ルーカス・レーム３世はこの聖人レオナルドを尊敬していた。また、以下の注(57)をも参照のこと〔原注76〕。

(52)　これらの小市場町は、スヘルデ河口と北海の間に位置するスヘルデ・デルタに立地し、アントウェルペンの外港として繁栄した。詳しくは、中澤勝三『アントウェルペン国際商業の世界』（同文舘、1993年）41-44 ページを参照のこと。

(53)　同上。

(54)　同上。

(55)　同上。

(56)　アントウェルペンについては、同上を参照のこと。

(57)　聖レオナルド礼拝堂は、アウクスブルクから４マイル離れた上部バイエルン地方のインクホーヘンとアイヒアハ（Inkhohefen und Aichach）近くに存在した。したがって、レーム３世はしばしばアウクスブルクへ帰る度毎に、同礼拝堂を参拝していた。1289年にすでに同地に聖レオナルド礼拝堂は存在していた。ここには、主に病人たちが参拝していた。15世紀末に奇蹟集がこの地でも編集された。しかし同礼拝堂は多くの参拝者を受け入れることができなかったので、1311年に新しい教会が建設された〔原注78〕。

(58)　このジルク・レーム（Gilg Rem）はやがてキームゼー（Chiemsee）の司教に、また同地の神聖ローマ帝国の侯爵（Fürst）になり、そして1520年にザルツブルクの助司教（Weihbisshof von Salzburg）にもなる。彼は1535年９月14日、51歳で死去した。――彼は司教になる前は、パッサウ司教座聖堂参事会員（Canonicus Capitularis zu Passau）であった（Rem'sches Geschlechterbuch. Mscr.をも参照）〔原注81〕。

(59)　このクリストフ・ヴェルザーは、――この人物はコンラート・ポイティンガーの妻となった、学識のあるマルガレータ・ヴェルザーの兄である――後に、レーゲンスブルグの司教座聖堂首席司祭（Dompropst）になった〔原注86〕。

このコンラート・ポイティンガーとその妻マルガレータ・ヴェルザーの結婚と家族については、H. Zäh, Konrad Peutinger und Margarete Welser――Ehe und Familie im Zeichen des Humanismus, in: *Die Welser*, S. 449–509 を参照のこと。

(60)　ヴェルザー商会からの金ではなく、自分自身が身銭を切って、主人と生活を共にした

〔原注85〕。
(61)　この haltong なる語句は聖遺物の意味である〔原注87〕。
(62)　geweltingenとは、力ずくで阻止する（verwehren mit Anwendung von Gewalt）ことである（Schmeller IV. 72 sqq）〔原注89〕。
(63)　注(47)を参照。
(64)　マリア信仰は南仏のプロヴァンス地方で普及している。このマリア信仰はとくに、聖マグダラのマリアをはじめとする3人のマリアが、イエスが墓から甦らせたラザロたちと一緒に、パレスチナから追放されてマルセイユに到着し、プロヴァンス地方の伝道にとりかかった、という伝説（物語）に依拠している。D・アットウォーター／C・R・ジョン（山岡健訳）『聖人事典』（三交社、1998年）、388ページを参照のこと。
(65)　聖アンナは、処女マリアの両親（ヨアヒムとアンナ）のうちの母親であるが、詳細は不明。なお、ヨアヒム崇拝は東方で、またアンナ崇拝は西方で人気があった（前掲『聖人事典』、418ページを参照）。
(66)　聖マルタはラザロの姉妹であり、復活したキリストが最初に現れ「わたしは復活であり、命である……」との宣言を受けた女性であった。彼女はラザロとともに、マルセイユに追放された（前掲『聖人事典』、396ページを参照）。
(67)　この者たち全員が、ヴェルザー商会の社員であり、生粋のアウクスブルク人である〔原注94〕。
(68)　この Verstreten なる単語は、おそらく約束、承諾など（Versprechen／Zusagen）の方言である（cf. Graff adh. Sprachschatz VI. 745 und Schmeller III. 689）〔原注95〕。
(69)　フランドル地方の都市については、市場での商品流通の視点から都市社会を捉えた、山田雅彦『中世フランドル都市の生成』（ミネルヴァ書房、2001年）と慈善救済の視点から都市社会を捉えた、河原温『中世フランドルの都市と社会』（中央大学出版部、2001年）を参照のこと。
(70)　このビスケー船には、オットー・ア・ダロインダ（Otto a Dareunda）と呼ばれる船長が乗船していた〔原注96〕。
(71)　この箇所の訳は、同「日記」の編者たる B・グライフによる解釈を利用した。なお、彼はここでの形容詞 forder は vorzüglich［優れた／立派な］の意味だと述べている〔原注97〕。
(72)　Ferreria とは、今日のフェロル（Ferrol）である〔原注98〕。ただし、これらの町を地図に置き換えてみると、この記載されている内容（2つの町の位置）が少し矛盾しているように、邦訳者には感じられる。
(73)　この hendel なる語は、ここでは商取引（Handelsgeschäfte）、購入・仕入れ（Einkäufe）、商議・仲買（Unterhandlungen）などの意味である〔原注99〕。
(74)　in Degredo legenとは、船舶検疫をする（Quarantäne halten）の意味である〔原注101〕。
(75)　当時、すでに、マデイラ島にヴェルザー商会の代理店が存在していた〔原注102〕。
(76)　これまで、ラ・パルマ島ではこの砂糖きび農場については知られていなかった。同島は周囲が25マイル（1マイルは約1.6km）の島で、ここには〔サンタ・クルス・デ・ラ・〕パルマと呼ばれる美しい都市がある。しかし、同島にはサン・アンドレアス（St. Andreas）と呼ばれるもう一つの都市がある。ここには、すばらしい砂糖を生産する4ヵ所の製糖工場（Ingenios）がある。このうちの2つの工場はツァウゼス（Zauzes）と言う名がついている。残りの2つの工場はタッサコルト（Tassacort）と言う名がついている。この点から、明らかなように、ヴェルザー商会は同島で、砂糖の取り引き（交易）を行っていただけでなく、独自の砂糖農場（Plantagen）を所有していた（cf. allgem. Historie aller Reisen Thl.IV.）。
　この点でも、「日記」の執筆者ルーカス・レーム3世が「日記」の14ページ〔本誌160ページ〕に、ポルトガル国王と対立した砂糖調達（Zuckerlieferung）について言及していることと関係している。1530年頃には、またすでにそれ以前には、ヴェルザー商会は製糖工場をも

はや所有してはいなかったように思われる。何故なら、コンラート・ポイティンガーが断言していたように、これらの砂糖農場は害虫によって大きな被害を出し、砂糖の生産量は以前と比べて4分の1にまで減少したからである。このことで、ほぼ20年前の1510年頃から、いかなるドイツ人商社もマデイラ島から砂糖を購入することも、輸入することもなかった（cf. Peutinger Unterricht ect. auf das Bedenken der Monopolien. Mscr. der Kreis-und Stadtbibliothek)。

マデイラ島では毎年、砂糖を5万アローバ（Arrobas）〔重量単位：11.502kg〕を生産していた。しかし当時、砂糖は極めて高価であったので、少量の砂糖を皇帝や諸国の国王たちに贈り物として贈られていた。

1573年、当地の有力者たるコンラート・ロート（Conrad Roth）がカウツェン街（Kautzengässchen）に1棟の小屋と製造所を建てた。その中に、真鍮の瓶、鉄製の棒、熊手などを生産させていた。しかし彼はやがて、その小屋で砂糖きびを煮〔砂糖生産を〕始めた。彼はスペインから果汁を購入していた。彼はそこから大きな利益を上げていたので、彼はしばしばスペインに行っていた。しかし、彼は向かい風のために、2年後にようやく同島に戻った。この時に、上記のロートはインドから輸入される大量の胡椒（Pfeffer）について、ポルトガル国王セバスティアン〔在位：1557－78年〕と30万グルデンで購入契約を締結した（Über Madeira und Palma vgl. Dr. Schmellers Nachrichten über Valentin Fernandez im 4.Bd. Abteilung der k.b. Akademie der Wissenschaften. 1847. 4^0 und Dr. O. Peschel, Gesch.des Zeitalters der Entdeckungen）〔原注104〕。

なお、この国王セバスティアンは幼少で即位したため、ジョアン3世の王妃カタリーナが摂政についた。彼が親政を開始するのは、14歳の時であった。またイエズス会の影響を強く受けたため、時代錯誤とも言えるイスラム征伐に取り憑かれ、北アフリカのイスラム地域征服を夢想した。しかし1578年7月14日のクサル・エル・ケビール（アルカルセ・キビール）の戦いで大敗を喫し、国王も24歳の若さで落命した。彼は未婚であったため、後継者がおらず、やがてスペイン国王ヘェリペ2世によるポルトガル併合の契機となった。併合期間は1580－1640年。これにより、スペインは「太陽の没することなき大帝国」となった。金七紀男『ポルトガル史』（彩流社、1996年）116-117ページを参照。

(77) この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従った〔原注105〕。

(78) フンシャルは今日、マデイラ島の県庁所在地であり、同島の主要な港町である〔原注106〕。

(79) この2人はマデイラ島でのヴェルザー商会の代理商であった〔原注107〕。

(80) マチコ（Machiquo／Monchricus）はマデイラ島の港町である〔原注109〕。

(81) この箇所の意味は、グライフにはまだ明確ではない。おそらく、ルーカス・レーム3世は次のように言いたかったのであろう。すなわち「私はこれら3隻の［軍］船の支援を受けて、名誉を汚さず撤退した」と〔原注110〕。

(82) 注(47)を参照のこと。

(83) この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従った。なお、グライフは、ルーカス・レーム3世が記していたgehederschen Recht von Maderaなる語句の実態については、判らないと述べている〔原注112〕。そのため、本誌では、この箇所の訳を「～などをめぐって」と、ぼかした。

(84) この箇所のforgett abは「出航（出帆）させる」（liess abfahren, abfertigen)、「商品をある所から別な所へ運搬する」（Waaren von einem Ort zum andern schaffen—speditiren）の意味である（Schmid, schwäbisches Wörterbuch, S. 190）〔原注115〕。

(85) この箇所の訳は、同「日記」の編者たるB・グライフによる解釈に従った〔原注116〕。

(86) この点から、国王がいかにルーカス・レーム3世の有能さを買っていたかが、また彼に対する国王の信頼がいかに大きかったかが、理解できよう〔原注117〕。